

2008年度基盤研究 身体知プロジェクト  
研究会報告「体をひらく、心をひらく  
ボクってどこにいるの？」

—2008年度の身体知実験授業を振り返って—

---

佐藤仁美 Hitomi Sato

岡摂子 Setsuko Oka

すがぼん Sugapon

コーディネーター 武藤浩史 Hiroshi Muto

手塚千鶴子 Chizuko Tezuka

横山千晶 Chiaki Yokoyama

慶應義塾大学教養研究センター主催

2008 年度基盤研究 身体知プロジェクト

# 研究会報告「体をひらく、心をひらく ボクってどこにいるの？」

— 2008 年度の身体知実験授業を振り返って—

2009 年 1 月 20 日(火) 18:00 ～ 20:30

慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎 2 階 大会議室にて

## Program

- |         |                                   |
|---------|-----------------------------------|
| 18:00 ～ | 授業のコーディネーターによる報告<br>身体知研究会と実験授業紹介 |
| 19:00 ～ | 授業参加者を交えた振り返りと意見交換                |

慶應義塾大学教養研究センター基盤研究身体知プロジェクト実験授業は、「従来の大学での教育は理論的言語による知が重視され、またアート教育といえば、アート専攻の学生のための教育が主であった。この実験授業では、これまで大学教育でないがしろにされてきた身体を、積極的に発声、呼吸、ムーブメント、コラージュ、造形など多様なアート体験と表現を通過させることで、その身体をほぐし、身体と心を柔らかくつなぎ、あらたな気づきの醸成を試みる。また、それらの試みを通しての自己理解や成長をうながし、学生達が、日々の学習や生活の営みに活かせる授業をめざす。」という趣旨でスタートしたものです。

2008 年度 ゲスト講師      佐藤仁美（放送大学准教授、臨床心理士）  
                                    岡 摂子（放送表現教育センター講師）  
                                    すがぼん（マイムエンターテイナー）

コーディネーター      武藤浩史（慶應義塾大学法学部教授、教養研究センターコーディネーター）  
                                    手塚千鶴子（慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター教授）  
                                    横山千晶（慶應義塾大学法学部教授、教養研究センター所長）



左：武藤浩史氏      中央：手塚千鶴子氏      右：佐藤仁美氏

# 心が動く・からだが動くー私たちの知らない私たちの身体

法学部教授・教養研究センター所長 横山千晶

身体知の実験授業を始めて今年で3年目。参加していると、不思議な気持ちに襲われるときがある。私たちのこのからだの持つすさまじいまでの表現力に圧倒される瞬間だ。もちろん初めからその豊かな表現力が開花するわけではない。しずかにしずかに。はじめは心が動き出す。そのうちにその心に突き動かされて気がつかないぐらい、あるいはあまりにももどかしいぐらい不器用にからだは反応していく。その不器用さ、その恥ずかしさがもともと殻を脱ぎだすと、あることを契機に今度はからだはとめどなく語りだす。ついで月並みな言い方だけれど言葉があふれ出す。そのような瞬間に何度も出会ってきた。もちろん恥ずかしさをしっかりとまといながら最後までゆっくりと物語るからだもある。その静かさと奥深さにもまた心打たれている自分がある。そして理解する。このような表現力の扉を開くのは、「他者」。そして語りだすのは「他者に見出された自分」なのだ、と。

3年目を迎えた実験授業で私は主に観察者の役割を担うことが多かったせいだろうか。あらためて見守るものの観点からからだの持つ表現力に頭をガツンと殴られることが多かった。考えてみれば、身体は言語以上に饒舌だ。そして敏感である。気をつけてみているとからだはいろいろなことを物語っている。ちょっとした視線の交差、うつむいた顔、何か言い出しそうな口元、触れるか触れないかの指先。それは言語以上にものをいい、心の琴線をやさしくはじき、心を乱す。考えてみれば、微かなにおいの変化、体温の変化、皮膚の色合いや触覚で母親は愛するものたちのからだや心の変化を察知してきた。視線の交差、相手のからだのちょっとした姿勢の変化で男たちは攻撃の準備を整えた。その本来の身体言語を私たちはまだ失っていない。それどころか、その道筋が与えられればからだはすぐにしゃべりだす。その言葉を他人もまたしっかりと受け止めて、反応することができるのだ。

今回、朝吹亮二氏の詩を「きっかけ」に用いながら、私たちは一貫して自分の存在と向き合ってきた。詩を土台にコラージュ、パントマイムとさまざまな表現法を自

分の身に落としこみつつ、最後にそこから得られた身体的な感情を再び言語化するという一連の作業の中で、際立っていたのは、他人とのコラボレーションである。他人の作った詩を朗読する。他人の作った作品に音楽をつける。自分の作品の中に他の人々の作品を入れ込んでいく。その場で生み出されるこの自然な身振りもまた「他者に見出された自分」「自分の認めた他者」である。身体のもつコミュニケーション能力を通さなければこのような言語上のコラボレーションも生まれなかった。

もちろん課題も数々ある。開花した身体の行き場はどこにあるのか。からだは時に暴走する。心を動かしてとんでもない場所へと連れて行って置き去りにしてしまうこともあるだろう。しかし3年目にして観察者を含めた参加教師陣のネットワークも固まりつつある。からだと心が爆発したときでも誰かが見ていてくれる、誰かがしっかりと手を引いていてくれるという安心感をこの限られた場の中でしっかりとシステム化していくことは必ずできる、と信じている。

私たちのまだまだ知らない私たちのからだ。その力は私たちが思っているより大きく、魅力的だ。そして恐ろしい。身体が希薄になり、からだによるコミュニケーションがますますスクリーン上の言葉の中に埋もれていくかに見える昨今、もう一度、その怖さ、その美しさを見つめてみよう。

そんな思いをあらためて強くした今年の実験授業だった。早速その内容を皆さんと一緒にじっくりと振り返ってみたいと思う。

## PROFILE

よこやま・ちあき 慶應義塾大学法学部教授。慶應義塾大学教養研究センター所長。

1989年慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程修了。1982～83年までダートマス大学（アメリカ合衆国）、1994～96年までランカスター大学（イギリス）に留学。

専門は19世紀のイギリス文学およびイギリス文化で、当時の表象文化、および身体研究。

# 研究会報告「体をひらく、心をひらく ボクってどこにいるの？」

## — 2008 年度の身体知実験授業を振り返って —

武藤浩史（法学部教授、教養研究センターコーディネーター）

武藤 皆さん、今日は、2008 年度身体知実験授業「ボクってどこにいるの」の最終回となるこの振り返りの集まりにおいでいただき、有難うございます。今回のメニューは資料 1 にあるとおりです。

### 資料 1

振り返りの会の流れ：

1. はじめに
2. 教養研究センター身体知プロジェクトと同プロジェクト身体知研究会の紹介（身体知実験授業参加者のために）
3. 身体知研究会から身体知実験授業へ
4. 身体知実験授業紹介（身体知研究会メンバーのために）
5. 2008 年度実験授業振り返りと意見交換

研究発表や意見交換を行っています。今日は、身体知研究会の例会も兼ねているので、去年の夏に慶應の鶴岡タウンキャンパスで泊り込みの体験型セミナー「鶴岡セミナー」を成功させた経済学部羽田功さんや体育のあり方について緻密な議論を展開される体育研究所の村山光義さんにもご出席いただいています。そこで、初めに、実験授業の参加者の方たちのために、身体知研究会の紹介をさせていただき、さらに身体知研究会のメンバーの方々のために今回の身体知実験授業の紹介をさせていただき、両者の接続を試みたいと思います。そして、その後で、この実験授業の振り返りを行い、皆さんと意見交換したいと思います。もちろん、ここが最も時間をかけるべき部分です。今日は、そのような流れで、この身体知プロジェクトの中の 2 つの大きな柱である実験授業と研究会を繋ぐことも試みながら、2008 年度身体知実験授業を振り返りたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

### 1. はじめに

慶應義塾大学には教養研究センターなる組織があり、21 世紀にふさわしい教養のあり方をさまざまな試行錯誤を繰り返しながら模索し続けています。その教養研究センターには、受身の授業つまり「座学」に取って代わる教育の可能性を探る身体知プロジェクトなる事業があり、同センターに 2 つある基盤研究の一翼を担う——もう 1 つはカリキュラム研究——重要な役目を果たしています。身体知プロジェクトは実験授業と研究会の 2 つから構成されており、皆さんの多くが参加したのはその内の前者ですが、後者の研究会もまた慶應義塾の内外から研究者や芸術家の方にご参加いただき、例会を開催して、

### 2. 教養研究センター身体知プロジェクトと同プロジェクト身体知研究会の紹介（実験授業参加者のために）

この身体知プロジェクトは、教養研究センターの母体となった教養教育研究会（リーダーは経済学部の羽田功さん）での話し合いをその土台として、横山千晶さん（法学部、教養研究センター所長）、熊倉敬聡さん（理工学部）、手塚千鶴子さん（日本語・日本文化教育研究センター）あたりが中心になって、2005 年に発足しました。資料 2 をご覧いただきたいのですが、この年にまず身体知研究会を始めまして、2005 年に例会を 8 回、2007 年に例会

## 資料 2

### I. 教養研究センター身体知プロジェクト(2005年発足)

I-1. 同プロジェクト内身体知研究会(2005年度例会8回、2007年例会7回、2008年度例会4回:2008年5月14日講師手塚千鶴子、6月24日講師佐藤望、7月24日講師村山光義、2009年1月20日講師武藤浩史)

身体知定義:座学(学生がじっと受動的に教師の講義を聞く)ではない、体験型授業により獲得される知。3つの軸(1.視覚と非視覚、2.言語と非言語、3.場)が大切(「身体知の理念と可能性」、『教養研究センターニューズレター』7号より)

これまでの講師:中島智(芸術)、武藤浩史(文学)、河野哲也(哲学)、熊倉敬聡(身体論)、手塚千鶴子(異文化コミュニケーション)、佐藤望(音楽)、村山光義(体育)など

これまで出てきたキーワードや問題点:徴候知(カルロ・ギンズブルク)の概念、中井英夫も精神医学に応用、細部に着目した直観知、狩人型知、フロイト・ホームズ・モレッティ、芸術と文学)、憑依(客観的知ではなく参加型知、暗黙知)、アートとカウンセリング、体育のあり方

を7回、そして本年度は例会を4回開催しています。今年は、5月14日に、異文化コミュニケーション研究の手塚千鶴子さんがアートをを用いたカウンセリングの例を紹介し、6月24日に、音楽の佐藤望さんが身体知の再定義を試み、7月24日に、体育の村山光義さんが、大学の体育が目指すべき方向とその教え方について、率直な思いと考えを開陳していただきました。そして、2008年度後期は身体知実験授業の方に精力と時間が取られていたので、今日が4回目となります。

さきほどもちょっと触れましたが、身体 の定義を議論すると、文化構成主義的な考え方が優勢な文系と最新の自然科学の成果を反映させようとする理系の間の断絶を初めとして、それぞれの領域で考えていることがばらばらですので、話がまとまりません。そこで、ここでは、異論があるのを承知で、教育の実践現場中心に身体および身体知の定義をしたいと教養研究センターは思っています。学生が受動的に教師の講義を聞くばかりの「座学」

ではもったいないことに身体がきちんと生かされていないという現状の反省を前提として、「座学」以外の、すなわち、体験型・参加型の授業を通して獲得される知を身体知と定義いたします。

そして、資料2にもある通り、『教養研究センターニューズレター』第7号に掲載された「身体知の理念と可能性」という記事で、身体知の理念を考えそれを実践に移す際には、1.視覚と非視覚、2.言語と非言語、3.場という3つの問題を軸にバランスよく展開してゆくことが大切であることを述べました。(その根拠と詳細については上述の記事を直接見ていただきたいと思います。)

身体知研究会は、2008年度の講師の方々の他にも、これまで、多くの先生方のお話をうかがい、議論を重ねてまいりました。とりわけ、2007年ごろに発表された、資料2に名前を挙げた中島智さん(美術、画家、武蔵野美術大学)、河野哲也さん(哲学、立教大学)、熊倉敬聡さん(身体論、理工学部)たちのお話が、研究会の理論的な側面を形成してきたように思われます。2007年度には、私(武藤浩史、文学、法学部)も中島さんの発表を受けて、文学研究における徴候知の問題を論じました。

これまで出てきたキーワードや問題点は大きく2つに分けることが出来ます。1つは理論的なもので、資料2にある「徴候知」、「憑依」がそれに当たります。もう1つは、大学の教育現場で遭遇した具体的な事柄を考えるとところから出てくる問題点です。

徴候知は、この身体知研究会ではまず美学者で画家の中島智さんによって提起された概念ですが、著名な歴史学者のカルロ・ギンズブルクが初めて指摘した19世紀末から注目されるようになったある特殊な形の知で、現代においてはこの種の知が大事であろうということが示唆されています。精神分析の創始者ジークムント・フロイト、フィクショナルな探偵シャーロック・ホームズ、美術鑑定家ジョヴァンニ・モレッティの方法に共通する知のあり方で、一言で言うと、重要な細部(=徴候)を糸口として全体に至ろうとする知の形です。狩人が森の中で見つけた獣の足跡のような小さな証拠からその獣の場所や様子を推測することから、狩人的知とも呼ばれています。著名な精神医学者の中井英夫もまたこの徴候という概念を借用・修正して、ある種の直観知を描き出しま

した。そして、この中島さんの提起を受けて、文学研究者の武藤が、自分の領域における徴候知の問題を論じました。そこで、文学研究では、徴候知がテキスト細部の読解を通しての歴史主義的解釈という頭脳的な営為を意味することが普通だけれども、身体知研究の文脈では、同時に文学テキスト内の細部（＝徴候）に鋭敏に反応する直観知という側面も重視しなければならず、最終的にはこの2つの徴候知を合体させることが理想的であると述べました。ですから、知的な営為との連動を最終目的とする、世界・人生・身体の詳細への感性を磨くことにより獲得される直観知というのが、この研究会における徴候知の定義と結論づけられると思います。

憑依というのは、哲学者の河野哲也さんと一緒にモリス・メルロ＝ポンティの『眼と精神』を読んだ時に出てきた言葉で、定義しがたいところがあるのですが、私なりに言うと、距離を置いて獲得される客観的知ではなく、暗黙知にも共通するところの多い、その場に参加してみることで獲得される参加型知とまとめればいいのでしょうか。単に憑依と言わずに憑依知としてもいいでしょう。体験を通して感性や感覚や観察力を磨くことにより獲得される知という点では、徴候知とも大いに共通するのではないかと考えています。

研究会では、理論的な概念とは別に、具体的な教育現場から生じる問題点もまた話し合われました。カウンセリングと異文化コミュニケーションがご専門の手塚千鶴子さんに話していただいた、日本の生活への適応に問題を抱える留学生が国際センターで創作作品の展覧会を開くことで自らの困難を乗り越えてゆく例は、個別的な物語の感動性という点でも、またそこに含まれる一般的な意義という点でも、きわめて興味深いもので、聞き手にアートとカウンセリング、アートとセラピー、アートと癒しの関係を考えさせ、今回の実験授業で行ったカラージュ・ワークショップとも繋がるものであります。それは、カウンセリングという行為、あるいはもっと一般的に言えば、自己と向き合うという営為において、言語的なものと非言語的なものの双方をどのように用いればいいのかという身体知研究における大問題にも豊かな示唆を与えるお話でありました。

それから、体育研究所の村山光義さんは、体育につい

て非常に緻密な思考を展開されました。特に私が印象に残っているのは、どこまで教えるか、という問題です。一例を挙げると、あるスポーツを教える際に、完璧に正しいフォームを教え込むのがいいことなのか、それともその一歩手前でとどめて、そのプレーヤーらしいやり方を尊重してあげるのがいいことなのか。それは、スポーツが上手くなるということとスポーツを楽しむということの間にある微妙な関係にも絡んできます。その辺については、村山さん自身も常に迷われているということですが、これはあらゆる教育現場で起こる普遍的な問題です。特に私の記憶に残っています。そして、座学系授業よりも、体験型の身体知教育においては、より重要な問題になってきます。

こんな感じに、身体知研究会では、徴候知とか憑依とか何かちょっと理屈っぽい話と、カウンセリングや体育の授業といった非常に現場的な問題の両方を話し合っていて、さあ、これからこれらの話をどうまとめていこうかというのが、今、この研究会が向かい合わなければいけない課題であります。

### 3. 身体知研究会から身体知実験授業へ

#### 資料3

このようなキーワードや問題点を踏まえて、どのように身体知研究会と身体知実験授業を接続するか？：どのように学生の「抑圧」を取り、解放させ、ブレイクアウトさせるか。教え込むことと教えないこと、場を作ること。

しかしながら、上記の理論と実践には共通することがあって、それは「意識を超えた部分が参与していて、体で分かる」という感じです。しかも、われわれが目指すのは、単に「体で分かる」というだけでなく、その種の知を、ある程度理論化でき、大学の教育現場で他者にその意義と教授法を伝達できるようになることです。それは、諸メディアで広く活躍する教育学者の斎藤孝の提言とある程度重なるものですが、単に一般的な教育スキルということに留まらず、慶應義塾大学というトップレベルの大学にふさわしいものを目指したいと思っています。

す。研究レベルでもその探求を進めて、その成果を教育に落とし込んでゆくというのが理想的です。そういう形で、「未来を先導」していきたいと思っています。

理想的な身体知の授業をどう実現させるか？ 実践的な事柄に焦点を絞ってみると、基本的な事柄を教えてから、どのように学生の「抑圧」を取り、その心と体を解放させ、潜在能力を目覚めさせ「ブレイクアウト」させるか、そして、その後で、その体験をどう振り返らせ、理解させるか、というあたりがポイントでしょうか。そのためにふさわしいのはどのような環境かという場の問題、どの程度教師が「教え込んで」どの程度学生の自発性や表現意欲に「任せる」べきかというインプットとアウトプットの関係の問題、あるいは体験と議論をどう結びつけるかという問題など、単に座学か座学でないかというだけでなく、さまざまな問題が浮かびあがってきます。

今回の実験授業でも、後で述べるようにテーマが「自己」ですから、いろいろと体験することによって何か今まで知らなかった自己と出会えて、その意味が体と頭の両方で分かったというようなところがあれば成功なわけですが、そのためには、これも後述するように、最初に「教え込み」、その後で体験させるという流れを一応考えてみました。

#### 4. 身体知実験授業紹介（身体知研究会メンバーのために）

ここからは、これまで3年間にわたって実施された身体知実験授業の紹介と、今年度の身体知実験授業の振り返りということになります。資料4から分かるように、「体をひらく、心をひらく」をメインテーマとして、2006年度の「楽しい実験授業へようこそ」で始まった身体知実験授業は、2007年度も「アートで体をひらく、心をひらく」と題され引き続き継続されて、広く塾内外から講師を読んで、コラージュ療法、スピリチュアル・カウンセリング、ダンス、アートを用いた教育など、さまざまな身体知教育の試みがなされてきました。また、身体知実験授業以外にも、慶應義塾の未来先導基金の助成を受けて行っている佐藤望さんの音楽の授業、横山千晶さんの英語ドラマの授業、羽田功さんをリーダーとする「鶴岡セミナー」、そして、武藤が始めた文学の実験授業

#### 資料4

同プロジェクト内身体知実験授業「体をひらく、心をひらく」（2006年度「新しい実験授業へようこそ」コーディネーター手塚千鶴子、熊倉敬聡、協力者高山緑：2006年9月29日～2007年1月22日まで計8回、2007年度「アートで体をひらく、心をひらく」コーディネーター手塚千鶴子、熊倉敬聡、横山千晶：2007年11月14日～2008年1月16日まで計4回、2008年度「ボクってどこにいるの？」コーディネーター武藤浩史、横山千晶、手塚千鶴子：2008年10月28日～2009年1月20日）

2008年度実験授業のテーマと趣旨：自分とは何かという人生の大問題に対して、「自己」をテーマとする詩を主教材として用い、作品解釈に朗読、創作、身体ワークショップをうまくミックスすることにより、よく動きよく感じつつよく思考することを可能にする効果的でユニークなアプローチを試みる。

日程：2008年10月28日（火）、11月4日（火）、11月11日（火）、11月18日（火）、11月25日（火）、12月9日（火）、2009年1月20日（火）各回18時から21～22時

参加者：計35名＋コーディネーター3名

授業アンケート 16通（1月20日現在）

評価内訳 A<sup>+</sup>：1 A<sup>+</sup>：9 A<sup>-</sup>：3 B：2 評価なし：1

など、身体知プロジェクトと人もコンセプトも大きく重なって大きな成果を上げつつある体験型授業がいくつかあることも、ここで言い添えておきましょう。（その内のいくつかに関しては、『教養研究センター・ニューズレター』第13号（2009年1月）の特集記事「体験と実学」をご覧ください。2008年度身体知実験授業の写真も載っています。）

#### 5. 2008年度実験授業振り返りと意見交換

さて、2008年度は3回目の試みで、「ボクってどこにいるの？」というサブタイトルが示すように、体験型の授業を通して「自己」について考えてみようというもの



です。企画した武藤が文学の体験型実験授業を実施した経験を生かして、文学テキストを中心に置いて、そこから始めようと思いました。ですから、2008年度の身体知実験授業は、2006年度、2007年度のそれとは異なり、同じ体験型の実験授業である文学の実験授業との連携を試みたものと言うこともできます。

慶應のフランス文学研究者に朝吹亮二さんという方がいるのですが、この人は知る人ぞ知る大詩人で、彼の作品に「たわしのわたし」というタイトルの、自己について考えをめぐらした楽しくてかつ深い内容の詩があったので、これで使ってみようと思って、メインテキストとしました。参加者には、まず本物の芸術言語に触れてもらい、それについて担当者（武藤）が講義をし、かつ皆で議論をした後で、朗読ワークショップを行い、心と体と頭で言語芸術を味わってもらってから、同じく自己をテーマとする芸術・身体ワークショップ——コラージュとパントマイム——を行い、創作活動と創作発表会で盛り上がって締める、というのが全体の流れです。その背後には、全体的な意図として、文学作品の味読と解釈で頭と心を鍛えてから、段々と自分で作ることや体を動かすことに焦点を移してゆき、全人的に「抑圧」を取って、最後に知性と創造性を爆発させるというシナリオがありました。よく読み、よく感じ、よく動き、よく思考することを相互連携させて育もうとしました。



コラージュ作成

#### 資料5：朝吹亮二「たわしのわたし」

あるいは、仕事をするわたし、テレビを見るわたし、寝るわたし、喋るわたし、ファミコンをするわたし、買物をするわたし、ワープロを打つわたし、食べるわたし、飲むわたし、あるいは、「田舎生れ」のわたし、「パリ生れ」のわたし、「島そだち」のわたし、「中世生れ」のわたし、「鳥ノ子生れ」のわたし、「毛々生れ」のわたし、「夢生れ」のわたし、あるいは、月曜日のわたし、火曜日のわたし、水曜日のわたし、金曜日のわたし、あるいは、ここにいるわたし、ここにはいないわたし、あるいは、あるいは、すこしずつ本当であるわたし、すこしずつ架空であるわたし、こうしたぼつぼつの、ばらばらの、べつべつになったたわし、たわし状のわたし、わたし状のたわしをいっこいっこ包装し、梱包する（わたし）、わたしは別にばらばらに置かれたたわしにこだわるわけではない、どこのたわしもばらばらに包装され、ばらばらに使用される、すこしずつ不揃いの剛毛をはやしているにしても、それぞれ、食器を洗ったり、流しを磨いたり、たわしの実用にかくべつ不満があるわけではない、ただばらばらに包装され、ばらばらに梱包され、ばらばらに使用されてゆくわたしのそのばらばらさに体系を与えたいのだ、ばらばらさのまま体系を与えたい（わたし）、たわしに体系などあろうはずもないが、いや亀の子たわしなのだから亀甲状に枝わかれする体系にはふさわしいかもしれないが、たわしをとりまく台所のパースペクティヴをみつめなおしたい、台所には台所のパースペクティヴがあって、たわしにはたわしのパースペクティヴがあるでしょう、ばらばらに包装さればらばらに使用されるたわしにもたわしのわたしというものがあってたわしのわたしのパースペクティヴというものがあってこれはこれでたわしの数だけ無数にあって台所のパースペクティヴとすこしずつかさなりすこしずつずれてばらばらの透明な亀の甲羅状に並んでいるのだと思う。そしてたわしというものは亀の子であったり鳥ノ子であったりもするわけだからたわしの体系というものも少しずつ生成してゆくのだらうと思う、いっこいっこばらばらに包装さればらばらに使用され放置されるたわし、たわしのイガイガを悪意だとしよう、イガイガを鞭だとしよう、イガイガを勃起し続ける性器だとしよう、イガイガは馴致されない、たわ

しは泡ぶくぶくのスポンジではないのだ、たわしはくたくたよれよれのモップではないのだ、たわしはたわし語ではなす、亀の子は亀の子語ではなし、鳥ノ子は鳥ノ子語ではなす、たわし語で語られたたわしの体系が台所の体系から逸脱していたとしてもそれはたわしのせいではあるまい、たわしはいつこいつこ包装され梱包されあちこちにばらばらに流通され、放置されるだけだ、たわしはたわし語でたわしの些細な現実を語るだけだ、たわしの体系を語るだけだ、たわしの体系というものは考えてみたら、考えてみるまでもないかもしれないが（亀の子の体系だって？ 鳥ノ子の体系だって？）、荒唐無稽なものにちがいない、ぴかぴかのシステムキッチンには不要の体系だ、だがたわしにとってはたわしのイガイガだけがたしかなたえなのだ、たわしにとってはたわし語生成文法だけがたしかな語法なのだ、たわしはシステムキッチンの片隅でイガイガだけになってじっと身をひそめる、無数のたわしは無数のイガイガのなかに閉じこもる。（亀の子も閉じこもる、鳥ノ子も閉じこもる）、閉じこもってたわしの語法を聞く、たわしの超微粒の想像界を開く、たわしのわたしを開く、いつこいつこ包装さればらばらに放置されたたわしはたわしの亀の子を開く、亀の子はまた亀の子を開く、蜘蛛の子を散らすとはいかないにしても、亀の子はまたまた亀の子を開いて（鳥ノ子は鳥ノ子を開いて？）たわしの体系の構造式を形成していくのではないだろうか、夜中に台所でたわしは（きみに話しかけたいわけでもないだろうが）たわしの巨樹の枝葉をのぼしてゆくのではないだろうか、無数の亀の子がたわしにみのったたわしの樹、無数の亀の子がぼたぼた落ちてきて台所をちょこまかがさごと徘徊しながら緑色に点滅したりしないだろうか、たわしたちにとってその透明な巨樹はたわしたちがかつてそうであった姿であり（そういう記憶が残っているのだろうか）、そしてもしかしたらたわしたちにとってたわしのわたしはその透明な巨樹そのものであるのかもしれない、無数のイガイガのたわしのわたしに思いをはせるわたし（のたわし）だ

全体の構成は次のとおりです。

#### 資料 6

各回の内容：

第1回（オリエンテーション、作品朗読・解釈、身体ワークショップ入門、講師 武藤浩史）

オリエンテーション（自己と感覚・運動、自己と他者）、「ボールで名前」ゲーム（場と名と自己）、「たわしのわたし」朗読と解釈（議論と講義）、鏡像的自己、呼吸する自己、足の裏自己、触る自己、自己ウォーク、自他ウォーク

第2回（朗読、講師 岡摂子）声を出す体の説明、ウォームアップ、「よだかの星」、「たわしのわたし」

第3回（コラージュ、講師 佐藤仁美）宿題として「私」グッズ持参、趣旨説明、「私」プリントの配布・記入、「私」グッズを用いた「私」コラージュ創作、皆で鑑賞・自作解説・質疑応答・語り合い

第4回（パントマイム、講師 すがぼん）パントマイム説明（観察力と想像力を用いた創造）、ウォームアップ、複数で「人間キャタピラー」、皆で他者を意識したウォーク・ラン、「でんぐりがえし」とその応用、キャットウォーク、手で「壁」を作って歩く、ペアで脱力ワーク・目隠しラン他、木杵を使った鏡パントマイム（朝洗面台で何かをやっていると現実と鏡の世界が入れ替わる）、すがぼん模範演技。最後に、次のための創作心得ハンドアウト配布

第5回（創作活動、講師 武藤浩史、横山千晶、佐藤仁美）創作説明、持ち寄った作品を読み合い、話し合う。引き続き創作実施

第6回（成果発表、司会 武藤浩史）創作発表会と自作についての質疑応答・話し合い第7回（振り返りの会、講師 武藤浩史）教養研究センター基盤研究身体知プロジェクト説明、研究会説明、実験授業説明・振り返り、自由討論

10月の28日が第1回で、今日、1月20日が第7回目で最終回となります。

まず第1回目は、武藤が授業全体の趣旨を説明してから、ボールを投げながら自己紹介をするというアクティビティで場を暖めながら、同時に自己が自他の連なる場という基盤の上に成立することを、体で確認しまし

た。それから、メインテキストである「たわしのわたし」を朗読し、互いに解釈や感想を語り合い、また武藤が精神分析からシステム論まで、資料7に記されているようなさまざまな自己観を参照しながら、「たわしのわたし」がこれらの時代を先導してきた知と比べても遜色のない高いレベルの自己論を展開していることを指摘しました。簡単にまとめると、「たわしのわたし」では、自分の内外にあるさまざまな「わたし=自己」に言及しながらそれらを統合すると想定される「自己」をカッコつきの「(わたし)」と表現することで統合的自己の仮象性を剔抉(てっけつ)するとともに、「イガイガ」、「びかびか」、「閉じ」ながら「開く」などさまざまな表現を用いることで、自己システムと社会システム間の必然的な相克やそれを解決しながら生きていく創造的自己も描かれていることを、テキストに即しながら解説しました。ここは、武藤が講師として確信犯的に「教え込んだ」部分で、その時はよく分からなかったけれども後でさまざまなアクティビティをしていく内にあの時の話が分かってきたというような嬉しい感想も参加者からありました。

また、その後で、リチャード・ドーキンスから道元に至るまで、多彩な自己論に言及しながら、武藤が自らの自己論について語ってゆくと、感覚と他者の問題が重要であることが分かってきました。そこで、最後に、体を動かしながら、感覚と他者の問題を体験するために、身体ワークショップをやってみました。鏡で自分の自己<視覚的自己>を見たり、呼吸や足の裏への意識集中や自己や他者への接触によって<非視覚的自己>を確認したり、自己を意識したウォーキングをすることによって自己を体感したり、互いに見つめあいながら歩いてゆくことで自己と他者の問題を感覚的に考えてもらったりしました。

先ほど述べましたように、身体知プロジェクトでは「どこまで教えて、どこから教えないか」ということが一つの大きな問題になりますが、この第1回目の授業は、全体として担当者(武藤)が積極的に介入し「教え込んだ」部分、と総括することができると思います。最終的に自発的な創作を行う際に、その土台を与えておかないと授業内容の統一性・首尾一貫性という点で問題が生じるという意識から、初回は担当者が、できるだけそれが体験

型のものになるように努めながら、いろいろと情報を与えました。このInputがその後どう生きてくるかということが気になるころでしたが、先述の通り、参加者からは肯定的な評価をいただきました。

#### 資料7

初回(オリエンテーション)ハンドアウト

身体を動かすことは抽象的思考の始まりである。(ミシェル・セール)

\* ボール投げ自己紹介(体、自己、連なる他)

\* 自己論、存在論

「たわしのわたし」対「いるか」

朗読、感想

マイ・ポイント:面白いだけ詩? 知の最前線に通じる自己観の提示 1. たくさんのわたし=たわしをいっこいっこ包装し梱包する(わたし)、たわしのばらばらさに体系を与えたい(わたし)→前野隆司のヴァーチャル自己。 2. たわしをとりまく台所のパースペクティブとたわしのわたしのパースペクティブ、すこしずつかさなりすこしずつずれて。たわしの体系が台所の体系と逸脱していたとしても。亀の子の体系。鳥の子の体系。びかびかのシステムキッチンとたわしのイガイガ→十川幸司の精神病観、自己システムと社会システム。双方の日々の更新。過剰不適応と過剰適応の間を生きる 3. イガイガとびかびか。イガイガって何? 存在=自己の臍?、過剰適応を阻むもの?→フロイト的こだわりの細部 4. 言語、想像→ジャック・ラカンの人間観(現実界、象徴界、想像界) 5. 生成=形成 イガイガの中に閉じこもって開く、たわしの亀の子を開く→たわしの体系の構造式を形成、たわしの巨樹の枝葉をのばしてゆく→ヴァレラとマトゥラーナと河本英夫のオートポイエーシス(行動による不断の自己生成=形成) → 6. 大存在としての透明な巨樹へ

\* 自己——1. レベルあるいは種類(遺伝子、免疫、摂食、呼吸、皮膚、有性生殖と個体死、社交、労働、宗教など、自己か自己意識か)、2. 矛盾(自己と他者、自己の感覚が生まれる基盤は他者との関係性にあり→欲望の原因「対象a」、しかし個体死→独りで死ぬ

でゆく)、3. 感覚 (五感、体の場所、時間性)、4. 身体ワークショップ (3、そして、2)

#### 1. レベルあるいは種類

リチャード・ドーキンス：遺伝子的自己

多田富雄：免疫的自己

安西祐一郎：生物的自己、認知的自己、社会的自己  
ダニエル・スターン&十川幸司：新生自己感 (生後2-3ヶ月、無様式知覚、感覚)、中核自己感 (生後5-6ヶ月、無意識的、欲動)、主観的自己感 (生後9-12ヶ月、認識、情動、情動調律)、言語的自己感 (生後15-18ヶ月、言語)

ジャック・ラカン：鏡像段階、欲望の原因「対象a」  
マトゥラーナとヴァレラ (河本英夫)：オートポイエシス→行為によって作り続けるものとしての自己システム論 (斎藤環の非トラウマ的引きこもり論)

「わたし」という言葉、英語と日本語の代名詞、「わたし」「ぼく」「おれ」「拙者」「自分」

前野隆司：自己意識の能動性やクオリアは幻想、実は自己意識はエピソード記憶のために用いられる受動的な存在に過ぎない。

道元：仏道をならふといふは自己をならふなり、自己をならふといふは自己をわするなり、自己をわするるといふは万法に証さるなり、万法に証さるるといふは自己の身心および他己の身心をして脱落せしむるなり。

#### 2. 自己と他者、個体死と絆

スラヴォイ・ジジエク「矛盾はあらゆる同一性の内的な条件である」

J・P・サルトル「地獄とは他者のことである」

R・M・リルケ「われわれはみんな落ちる この手も落ちる ほかをごらん 落下はすべてにあるのだ けれども ただひとり この落下を 限りなくやさしく その両手に支えている者がある」

J・M・クッツェー「かつてはなにものか、私の顔をじっと見つめているものがあつた。そしてそれをいまだに私は理解していない」→痕跡としての他者→対象a  
『葉隠』(朝毎に懈怠なく死して置くべし)あるいはマルティン・ハイデガー『存在と時間』か、カール・レーヴィット『共同存在の現象学』あるいはエマニュエル・

レヴィナスか

養育者に語りかけられて現れる自己や、ルイ・アルチュセールの権力に語りかけられて現れる自己

⇔ 鏡に語りかける自己

#### 3. 感覚・運動

ミシェル・セール：魂はほとんど点的な場所に宿っており、そこで《われ》が決定される。体操の選手は自分の魂を鍛錬して、その魂のまわりで身体を動かしたり身体を丸めたりする。・・・跳躍の選手は魂をもっていて、それをバーの上にあるいはバーの向こうに投げる。(しこ、てっぼう、つっぱり、正しい男の殴り方、正しい黒板の消し方、正しい階段の上り下りの仕方)

腰肚文化

ケツの穴をしめろ

足の裏から息を吸って

頭のとっぺんから糸で吊るされているように感じて。

背筋が伸びるでしょ

頭を冷やす、頭寒足熱

頭対体

視覚対非視覚

言語対非言語

#### 4. 身体ワークショップ (感覚、運動、自己と他者)

視覚的自己 (鏡像自己、カメラ自己)、鏡像かたりかけ自己、鏡像はげまし自己、非視覚的自己 (息=自己、胃袋=自己、欲望=自己、触覚的自己ほか)、手=自己、合わせ手=自己、手=自他、足の裏=自己、手で唇=自己 (「肉体は局部的にはあるが魂のキャッチボールをしている」)、口で手を噛む=自己、足の裏+息=自己、足の裏+腹式呼吸=自己、仰向け+腹式呼吸=自己

自己ウォーク、腰=自己ウォーク、人生=自己ウォーク、とげとげ人生=自己ウォーク、やわらか人生=自己ウォーク、自他ウォーク、まなざし自他ウォーク、人生=まなざし自他ウォーク

ゆすぶり自己、ゆすぶられ自己、ゆすぶりゆすぶられ自他

+ 音楽 (聴覚+リズム自己)

言語的自己、非言語的自己

第2回目(11月4日)は朗読です。この回はドラマティック・リーディングを行う朗読の専門家である岡摂子先生にお越しいただきました。岡先生は以前にも教養研究センターが開催している「新しい文学の実験授業」で講師を務めてくださったこともあります。その回で行おうとすることは文字言語を音声に置き換えていくことで、自己対話をしながら同時にその対話を音声にし、他人に伝えるという試みでした。すでにここで「言葉」の意味を考えることの意味が問われます。自分の「意図」を持って話さない言語は相手にも伝わりませんが、自分の感覚の中できちんと納得して言ったものは言語化したときにちゃんと伝わります。この試みは非常に難しいものですが、その試みにチャレンジすることが今回のテーマです。今回先生が題材とされたのは宮澤賢治の短編「よだかの星(ぶとしぎ)」です。この短編を選んだ理由に、非常にわかりにくいということがあります。「他者」としてその難しさに挑みながら、そこに息吹を吹き込むことが課題です。と同時にこの物語は読んでいながら、次第に主人公のよだかの心の変化に没入してゆくことのできる作品です。よだかを通して私たちも自己と他者を感じることができる作品がこの「よだかの星」なのです。授業はまず「声」を出すことから始まりました。呼吸と発声のメカニズムの説明から始まりました。その後、体をほぐし声の出しやすい状態にした後、あごの体操と発声練習を行ってよいよ朗読です。岡先生が行っているドラマティック・リーディングは、読み方の中に読み手の解釈を反映させていきます。今回の「よだかの星」も短編ながら主人公の感情のうねり、ほかの登場人物との掛け合いなど、解釈を反映させていくのがなかなか手ごわい一作であることが読み始めてすぐにわかりました。岡先生は言葉の響き一つひとつに解釈を十分に載せることができるように、文字から五感を呼び覚ますようにと輪読しながら指導していかれました。この物語を読みながら解釈を声に載せることで、読み手が自分自身についても発見していく過程を参加者は体験していきました。その中でドラマティックなエピソードがあったのでご紹介したいと思います。順番に輪読していき、ちょうどよだかが死を決心して弟の川せみのところに別れを告げに来る場面に来ました。当たった参加者の抑えた、それでい

て気持ちがまっすぐに伝わってくる読み方にみなしんとして聴き入っていました。よだかが最後の別れを川せみに告げる場面「さようなら。もうあわないよ。さようなら」のせりふのあとで、彼は言葉を詰まらせました。講評のときに岡先生が彼に尋ねました——「最後でどうして詰まったのかな？」彼はこう答えました——「読んでいるうちに、自分が一番きつかった時期のことを思い出しちゃって、そのときの気持ちから抜けきらなくなってしまったのです」。似たときの感情を呼び覚ましてそれを音声で表現したときの力強さを岡先生は指摘し、同時にそれを評価しました。おそらく声に出して読むことで、彼は内省へと入って行った、そしてそれを引き出しながら外に出すことができたのでしょう。その深さが朗読の中に現れたことで、聞いている人々も心を打たれたのです。同時に当日のアンケートも興味深いものでした。ある参加者は次のような感想を述べています。「テキストにぶつかったときに生じるごちゃごちゃした感情、頭と身体との二律背反をもっと露骨に武骨に出していいと思うし、出ていいと思う。それを頭で理解した解釈ですべて統一できるわけではないと思う。作者の意図を超えて、もっと自分に引き付けて読むやり方もあっていいと思う。」明らかにこの参加者はテキストを目の前にして様々な感情に襲われたのでしょう。その感情を統一させて他人に伝えることの困難さと、そういった統一されない自己をそのまま受け入れることの必要性を朗読がもたらしたと言えそうです。

「よだかの星」の次は「たわしのわたし」の朗読です。朗読に入る前にもう一度この詩を初めて読んだときの感想をお互い披露しあったあとでこちらも輪読を行いました。この詩では、「よだかの星」と違って、意味をとって読もうとしてもその行為が裏切られる点が特徴です。今度はドラマティックに読めばかえって混乱してしまう。それよりも構造をとらえて饒舌に語ることが肝心でしょう。聞く人に好きなように感じてもらうきっかけを与えることです。同時に自分なりのリズムを掴んで読む楽しさを感じることです。今回はその視点から読み進めていきました。この詩はどこで切って次に行ったらよいのか、なかなかわからない、ということではじめは戸惑っていた参加者たちでしたが、この詩特有の句読点の使い

方などに注意しながら、そして流してはいけないキーワードに気をつけながら読み進めていくと、なるほど独特のリズムがそれぞれつかめていくのです。そして岡先生が特に注意を促したのは、この詩が最後に向かって非常に壮大な空想の世界へと広がっていく様子です。その部分の「広がり」をしっかりと声にのせるようにとの指導を受け、参加者の一人ひとりが読みながら空想の世界に引き込まれていくかのようなようでした。リズムを掴んだあとは、構造を捉えることに留意しながら輪読し、ひとつの詩の世界を参加者全員で構築していきました。一人がよい表現をするとそれが他の参加者にも伝わり、すばらしい詩の世界を作り上げることができました。最後は読み手の心が開放されていくのが聞いている岡先生にも伝わったようです。

第3回目の授業（11月11日）は放送大学の佐藤仁美先生をお迎えしての授業です。コラージュの意味とコラージュを使った精神療法について佐藤先生の説明で始まりました。もちろんコラージュは芸術的な表現法ですが、同時に佐藤先生が自ら精神療法の中でも使っているものです。切り取り貼り付ける過程で混乱している自分の部分部分をつなぎ合わせ全体的に見ていく方法でもあるのです。今回は自分の好きなものを切ったり貼ったりする作業を行うことで自己を視覚的に表現していく作業を行おうというわけです。先週の授業ですでに自分の好きなものを10個持ってくるように参加者は言われています。それを使いながらコラージュを作ることになります。みなそれぞれ10個持ってきていますが、中には靴や香水瓶などを持ってきている人もいました。

始める前にまずはひとつひとつのものに関して「～の私」というリストを作るところから始まりました。つまりそれぞれのアイテムに関しての「私」を言葉で表現していく作業です。続いて10個のものをそれぞれが床の上に並べまずは客観的にそれらを眺めることから始めました。これは作業の準備であると同時に自分の中にある別々の自分をこうして並べて概観することでもあります。まだ10個見つからない人々はそれぞれ近場に探しにいきます。早速みなが持ってきた写真や雑誌記事、そして持ち物の品評会が始まりました。このようにして、自分の好きなものを通して自己について語り合っ

から、いよいよコラージュの作成です。10個のアイテムのうち1つだけ残して、それ以外のものでもコラージュを作っていくことになりました。今回佐藤先生が用意してくれたのは白い紙ロールで好きなところからそれぞれ好きな大きさでと形で紙を切り取って、あるいは破って張り込むための紙を確保するところから始まりました。もちろんあとで紙をまた切り取って足していてもかまいません。それ以外に今回用意されたのは折り紙と手に直接つけることのできる手絵の具です。今回は一度で長いロール紙がなくなるほど、みなが大きく紙を切り取りました。自分のスペースを確保して一人の世界に入り込みながら作っていく人、会話を楽しみながら作り進めていく人、時々周りの進捗状況を見ながら作っている人、それぞれその作り方もさまざまです。早めに終わった人たちは互いにコラージュの意味を尋ねあってはそこでまた会話が弾みます。開始から1時間後に今度は黒いロール紙を床いっぱいに広げて出来上がったコラージュをそれぞれ黒い紙の上に並べていきました。およそ20分後に並べ終わると続いて皆でシェアリングをしました。シェアリングの際に使ったのが先ほど作ったリスト「～の私」です。非常にたくさんの物語が詰まっているためにう



第3回授業 コラージュ作成



まく説明できないという参加者もありました。今回の参加者のうちの2人は外国から来たばかりの参加者と留学生で、言葉でなくとも伝わる部分の大きさに、異文化コミュニケーションの可能性も感じられました。コラージュをただ作るのみならず、作った本人から解説を受けることでより視覚的な世界が広がっていく面白さもシェアできましたし、このコラージュを通して自己表現のみならず、作り手の豊かな物語をシェアできました。普段は恥ずかしがり家でなかなか自己表現ができない人でも、自分の作ったコラージュを目の前にすることで生き生きと言葉で物語をつむぎだすことができることも大きな発見でした。今回の授業の意義はこの2つにあると思われます。つまり言葉以外のものをつかって自己を表現するという。そして同時にそうしてできた視覚的なものを使ってもう一度言語表現を行うということです。双方が刺激を与えあいつつ、新たな自己表現と自己発見、そして他者発見の現場が立ち上がってきたのでした。最後に佐藤先生がおっしゃったことは非常に印象的でした。最後にとっておいたひとつのアイテムは自分のお守りとしてとっておいてもよいし、これからさらに今回のコラージュに手を加える際の最後のものであってもよい。つまり、このコラージュ創作に端を発してこれから私たち自身の物語をさらに発展させていく可能性を示して授業は終わりました。



第3回授業 コラージュ作成

4回目(11月18日)は国内外で高い評価を得ているパフォーマンス集団「水と油」のメンバー、すがぼん先生によるパントマイムのワークショップです。最初は「パントマイム」の意味の説明から始まりました。「パン」と「マイム」の言葉からわかるように、体を使ってすべてのことを模倣する、ということです。そして、その模倣の仕方の特徴は「言葉を使わないこと」です。そのために必要なことは観察力と想像力です。演ずる対象をきちんと観察してみないと表現はできません。そこでまずは観察力を研ぎ澄ますことから始まりました。私たち人間は視覚から来る情報に最も影響を受けているということはよく知られていますが、その観察力がいかに信用できない散漫なものであるかを実感することが最初の作業です。すがぼん先生はまず全員に部屋の隅々までよく観察するように言ったあとで目をつぶって部屋の中のあるものがどこにあるのかを指さすように言いました。結構勝手の所をみな指さしています。観察力をまず研ぎ澄ますことの重要性に注意が向けられました。研ぎ澄まされた観察力の次に想像力を働かせるのですが、そのために必要なことは、全身を使って表現することです。

このふたつの力を構築するために今日のワークショップは2部構成となりました。前半では身体ワークショップを通して自分の体と向き合い、観察すること。後半は他人との場の構築です。最初の柔軟体操では体の各部分、普段使っていない筋肉にも意識を向けさせる動きをいくつも繰り返しました。「きつい」という感覚もまた自分自身であることをなんどもすがぼん先生が繰り返します。こうしてあらためて体の感覚を呼び覚ますと同時に基本的なパントマイムの動きを導入しながら、他の力に動かされる自分の体を想像しながら形成していきました。興味深かったのは指導のときにすがぼん先生が繰り返す言葉が、この地球や自然の力と個々の体のつながりを意識させるものだったことです。

柔軟体操を20分ぐらい行った後は次第に集団の動きに移っていきました。3列に寝ころび間を詰めることで同時にキャタピラのように転がる作業です。前の人の動きに合わせてキャタピラの動きを行った後は、次に一人一人がそのキャタピラの上に乗ります。そしてキャタピラ役の人々が上に乗った人を運ぶという作業です。

が、この作業で感じられたのは他人の体の感覚です。他人の体の重みとくぼみから自分の体の感覚まで確認できます。

次に行ったことは歩くことです。その過程を追っていくと次のようになります。まず自然に歩き出す。次に人のいない所を歩く。空気をかき混ぜながら歩く。下の空気をかき混ぜながら歩く。上の空気をかき混ぜながら歩く。上と下も全部使って空気を混ぜ合わせながら歩く。また、普通に歩く。続いてだんだん全体のレベルを上げながら速く歩く。その際人の空気を感じながら速くなっていく。最後は走るところまでスピードを上げていく。常に周りを意識しながら歩き、歩く範囲が小さくならないようにする。そのためには人のいない所にどんどん入っていくことが大切。そして徐々にまた空気を感じつつスピードを落とし、やがて止まる。この1過程を終えた後、つぎのワークショップは皆で歩きながらだんだんとその歩く範囲を狭めていくことです。密集した中で歩く作業。その時も人とぶつからないことが大切です。続いて解放されて全体を使って歩きます。続いて特定の誰か一人を勝手に決めて、その人との距離を一定に保つワークショップです。その時にその人が誰かということとは誰にも言いません。よってその人が動くとき自分も動かななくてはなりません。ターゲットを数名変えて同じ動作を繰り返した後は、続いてその特定の人となるべく距離を離す作業です。こちらもターゲットを数回変えた後、今度はなるべくその人とくっつく作業を行いました。はためで見ているとこれは非常に不思議な光景です。数珠つなぎのようにくっついて歩いている人。くっついてくる人から逃れようとする人。そこにすでにいくつかのパントマイムが生まれているかのようです。

次の歩く作業は体がどのように自分の思う通りに動かないのか、ということを変更して確認するための作業です。体の一部一部をバラバラに動かしていく作業。首からを顔だけ独立して動かしていく作業です。次に行ったのは手と腕とをバラバラに動かす作業。手を地面についているときはできる作業が手を宙に動かした途端にできなくなる。人間の体は普段意識せずに動かしているものだが、それを意識して分解してみようとするとうまくいかない。「たわしとわたし」の詩に見えるように、自分自身を分解し



第4回授業 人間キャタピラ

てみる、考えてみることの不思議さ、おもしろさを改めて参加者は感じたのでした。

その後5分間の休憩を入れて、後半です。今度はまさに全身を使っているワークショップです。インナーマッスルをじかに感じるワークショップで、床の上を転がるという作業を様々な体の部分を中心に行います。おなかで回ったりあおむけになった後で足を持ち上げてその位置からでんぐり返りを行う作業をとおして自分の体を地面との関係性をじかに感じ取っていきましました。一定の速度でゆっくりと行うことで自分のインナーマッスルと地面



との関係を感じ覚として覚えていくことができます。

次に再び歩く作業ですが、今度は3列になって部屋の端から端まで、まず普通に歩く。次に頭からつまされて、背筋が伸びた状態できれいに歩く。今度は手の動きも意識して歩く。きれいに振りながら意識しながら歩いていく。その時に手の先に筆が付いていて、その筆で線を引いていくような気持ちで歩いていく。そのときその線が蛇行しないようにすることが大切です。次にひきこもった状態から大きく出ていくつもりで歩く。同時に常にリラックスしていることが大切。今度は自分なりのきれいな歩き方を想像しながら歩く。部屋の端に着いたらポーズ。

その後でいよいよパントマイムのワークショップに入っていました。まず右に壁があると思って、それを触りながら歩いていく。この作業に入る前にまずは観察の時間を設けて、実際の壁を触ってみることから始めました。その感覚を覚えておいて空気をその場に「固定する」作業を繰り返していきます。なぜ何もない所に壁が見えるか。それはこの固定の作業なのです。視点を据えることとこれは対応するのでしょうか。次に大切なのは一つ一つの動作の丁寧さです。ゆっくり時間をかけて体と空間の対話を行うことです。まずは片手、それから両手



第4回授業 ミラー

で壁を感じていきます。次第に想像力を働かせていき、壁にぶち当たる、S字型の壁に沿って歩いて行く、下に潜る、それから這って行ってまた上に伸びていく…。壁の世界の複雑さの中に自分の想像力を働かせて体を慣れさせていく作業です。人によってはすっかりこの創造の世界の中にはまって実に見事に壁を作り出します。そのたびに見ている人々の間から「見えた!」という驚きの声が自然に出てきました。まさに想像の世界から視覚の世界が現出するかのようでした。

パフォーマンスする側も見る側も一体となって盛り上がった後に休憩をはさんで、最後の作業は他者との関係の構築です。信頼関係を築くためのいくつかのワークショップがここでは行われました。ペアになり、一人が寝ころび脱力する。その脱力した手や足、頭をもう一人が静かに振り動かしていきます。なかなか力は抜けませんが次第にリラックスしていきます。このリラックス感と相手に自分の体を預けているという気持ち良さから次第に相手に自分をゆだねる気持ちが生まれてきます。続いて向き合って体育座り。それから手をつないで互いに引き合いながらその力を利用して立ち上がる作業。今度は背中合わせになって相手の背中に自分の体重を預け、手をつなぐことなく、押し合う力を利用してそのまま立ちあがる作業。その際「せ〜の」などの合図の言葉は一切使わずに、体と体の対話のみで、立ち上がっていきます。

信頼の作業はさらに続きます。今度はペアのうちの一人が目をつぶってもう一人が手を引いて周りの人にもぶつからないように空間を移動していきます。思わず「怖い」という言葉が漏れます。相手をどれだけ信頼できるか。はじめは「怖い」という声が漏れていますが次第にみな黙って歩けるようになります。部屋の隅から隅までこうして歩いていきます。今度はいくつかのペアがどんどんスピードを上げて走ります。ほかのペアは壁にぶつからないように走っている人を守ってあげます。

信頼関係が構築されたところで今度はそのペアで「ミラー」を行います。一人が好きに動くのに対して、もう一人は鏡になったつもりでその動きを模倣します。行動を起こす人はちゃんと相手がついてこれるように注意しながら動いていきます。相手のことを考えながら動くことが大切です。そして、今回の最後のワークショップは

木杵を用いて、ペアが鏡の世界のこちら側と向こう側に分かれたパフォーマンスです。設定は、朝起きてきて鏡を見ながら身づくりをするというもので、ある時点で、鏡のこちら側と向こう側の行動をずれ、最後にこちら側の実物と向こう側の鏡像が入れ替わってしまうというパフォーマンスです。ペアで何分か打ち合わせと練習をした後で、皆の前で音楽に合わせて発表会を行いました。体を動かして自分の身体感覚を確認するところから始まり、最後は他者との関係の中で自己を見直す機会が与えられたワークショップでした。

ワークショップの後は参加者からのたっでの希望ですがぼん先生によるプロのパフォーマンスで幕を閉じました。すがぼん先生が参加者との掛け合いのもとに想像の世界を広げていくのが印象的でした。

さて、自己の感覚と運動、自己と他者の問題を、抑圧から解放されたリラックスした状態で体験したわけですが、次はその状態、その体験を、創作に結び付けることになります。自己は常に行為によって作られ続けるというオートポイエーシス的な思想を体現すべく、リラックスして抑圧の取れた状態の中でクリエイティブな行動によって最後は自己を作り上げることを体験してもらおうということです。コーディネーターの武藤からその点を踏まえて、自己をテーマとする翌週からの自由創作活動に関して説明をおこないました。ハンドアウト（資料8）を用いて、創造力の普遍性、創作することの意味を解説し、「たわしのわたし」にインスパイアされた武藤の試作による創作作品モデル「わたしのしたは…」が朗読されました。

#### 資料 8

2008 年度身体知実験授業

#### 創作心得

武藤浩史

\* 創作力（クリエイティビティ）のない人間は存在しません。皆さん、夢を見るでしょう。とんでもない内容の夢を。あれは、夜になって、昼間の抑圧（恥ずかしさとか）が取れて、皆さんの創作力が暴れまくった結果です。はじめはちょっと恥ずかしいかも知れないけれど、抑圧を取って、クリエイティビティという大海に思い切り飛び込んでください。そこで、あなたの知らない自分に出会えることでしょう。

創作を楽しむとともに、知らない自分に出会うこと、創作的行動（それは芸術に限らず、会社の仕事でも同じ）によって自己が作られる（オートポイエーシス）ことを実感していただきたいと思います。

\* 「自己」をテーマとして、これまで行ったアクティビティを参考にしながら、自由創作（朗読も含みます）をしてください。どんなジャンルでも構いません。詩でも、コラージュでも、パントマイムでも、演劇でも、それ以外（作曲と歌、短編小説、講談などなど）でも。あるいは、複合的な作業、つまり、詩（「たわしのわたし」あるいは自作詩）の朗読に合わせて音楽を付けるとか踊るとか、自作コラージュに詩を付けたり解説文を付けたりするのも結構です。

\* 最終日（12月9日）に、各人3分ぐらいの長さで発表し、質疑応答をします。自分の作品がどのように自分の自己を体現しているか、考えをまとめておいてください。

\* 12月2日はお休みですので、次回11月25日までに、創作作品を準備しておいてください。それが持てこれるものであれば、持参してください。いくつかの班に分かれて、それぞれの作品を見せ合いコメントしたり質問しあうところから、作業を始めたいと思います。もちろん、創作の苦しみにあえいでいる人は、すごってください。われわれもお助けします。

\* 複数でグループを作って集団創作しても OK です。

\* 創作例：「たわしのわたし」の影響を受けて、言葉遊び的な（でもマジな）詩を作ってみました。

自作コラージュの中にある「デス」という言葉とも繋がっています。

わたしのしたは…

武藤浩史

わたしのしたはデス

ぬるぬるしたしたでもデス

ひとのくちにはいったらゆらめくのデス

しろいちょうのようにとびまわってからまりからまりデス

まよいながらさまよいながらとろとろあかみのごてんをはいかいちゅーデス

はるかなところからはてしなくとおいところからデス  
わきあがるのデスわきあがるのデス

いちばんたいせつなプレゼントをふるえながらふるえながらあなあなあなたにさしあげますデス

ぶるっ ぶるっ ぶるっ てえ～

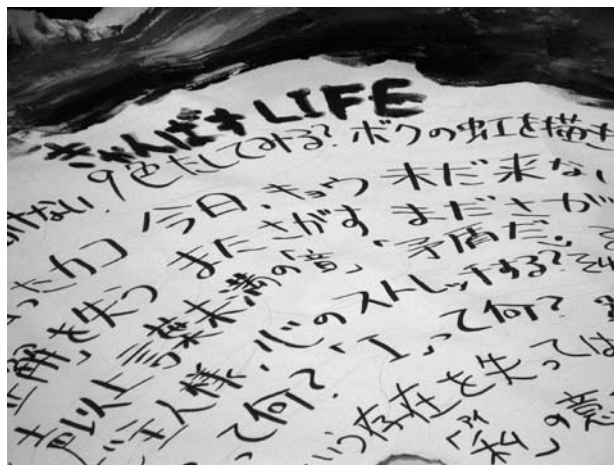
したのわたしはからだじゅうをみどりピカピカに光らせて、掃除機の横にころがってしまいました

デス

いいえ

生きている

死とダンスをおどりながら



実験授業参加者の作品

て話かけながらそこから再びインスピレーションを得ている様子でした。同時に今回の授業では12月9日に向けての具体的な準備が進みました。自分が創作した作品をどのような形で発表するのかということです。戯曲を作った伊藤君は参加者の中から数名の演者を選びました。三谷さんは自分の半生ともいえる素晴らしい詩作を誰かに読んでもらいたいと申し出ました。福山さんは自ら詩を作っただけでなく、講師の武藤が書いた詩(資料8)に自ら声による音楽をつけたいと申し出ました。このようなコラボレーションの発案から、文字による発表を演劇化したり、コラージュや絵芝居によって視覚化したりするアイデアが次々と生まれ出ました。自己についての創作がそのまま他者との関わりへとつながっていく新たな関係性の構築が生まれました。

第6回は、実験授業の集大成である創作発表会です。コメンテーターとして、講師の岡摂子先生(朗読)、すがぼん先生(パントマイム)、花崎杜季女先生(地唄舞)、そして、当実験授業の使用テキスト「たわしのわたし」の作者である朝吹亮二先生(詩人、本塾法学部教授)においでいただきました。創作発表は次のような順番で行われました。

1. 有田八州穂(朗読)
2. 千田るみ子(朗読)
3. 新井由紀子(コラージュとコラージュを基にした自作詩「たわしのわたしを内包するわたし」の朗読)
4. 三谷敏子(自作詩「わたしのフランス語」。朗読は

第5回目(11月25日)の授業は今まで体験したことを基に創作活動を行うことです。講師は、佐藤仁美先生とコーディネーターの横山千晶および武藤浩史です。参加者は各自自分の創作作品を持ち寄り、その作品をもとに意見交換を行うと同時に、12月9日の最終回に向けてさらに創作を進めました。作品としては、参加者の三谷敏子、福山孝子、伊藤弘了が作ってきた詩と戯曲を読みあい、さまざまな角度からコメントしあった後に、それぞれの創作活動に入りました。自作について皆がコメントを言い合うという経験そのものが非常に新しい体験でしたが、そのあとに続くこの活動舞台がそのまま不思議な空間を作り出しました。2週間前に作ったコラージュを持ち出してさらに作品を仕上げていく人々を背景に、演劇の練習が行われ、音楽に合わせて自然とダンスが始まるなど、それぞれの活動が、別個に行われていながら互いに共鳴しあい影響しあっていました。この活動空間そのものが一つのパフォーマンスの場と化したかのようでした。言語創作活動にいそしむ人々も時々音楽に聞き入ったり、コラージュを作成する人たちのところに行っ

嶋田章子と横山千晶)

5. 堤麻紀 (スピーチ「心の世界遺産」)

6. 福山孝子&武藤浩史&横山千晶 (自作詩「わたしのしたは…」の武藤による絵芝居、福山の声と横山の音響のコラボレーション)

7. 高香子 (福山孝子) & 山本理 (自作詩「恋するたわし〜散文・たわしのわたし〜」の朗読と山本君の演奏のコラボレーション)

(休憩)

8. 吉田和子 (コラージュとその解説)

9. 日吉信貴 (現在考えている文学作品の構想紹介、およびディスカッション)

10. 高杉佳 (朗読)

11. 堀江慎平 (朗読)

12. 堀江温子 (エア太鼓)

13. みゆき (伊藤弘了) (創作戯曲「冬美の季節」のパフォーマンス。出演：米村友希、日吉信貴、山本理、堤麻紀)

14. 宮城輔 (コラージュと自作詩「きゃんぱす LIFE」の朗読、音楽のコラボレーション)

15. 湊祐典&山本理 (即興ダンスと即興演奏のコラボレーション)

16. 山本理 (自作詩「宇宙」の朗読)

17. 手塚千鶴子 (立体コラージュと解説)

4時間に及ぶ大発表会となりました。今回は今までかわってくださった講師の方も参加してくださり、朗読に関しては岡先生からのコメント、詩に関しては朝吹先生からのコメント、エア太鼓のパフォーマンスにはすがぼんのコメント、そしてダンスに関しては花崎先生からそれぞれコメントをいただきました。どの作品もただ発表するだけでなく、その発表を通じてどのように自分を表現しようとしたのかをそれぞれが解説し、同時に一つ一つの作品とパフォーマンスに関して密度の濃いディスカッションが展開されました。また上のスケジュールを見てもわかるように、多くの参加者がそれぞれのパフォーマンスの中に参加し、他者の表現を分かち合い、そこに表現された「自己」をより厚みのあるものにしていたことも非常に印象的でした。大勢の人にとってこの

ような形で自分の創作を他者の前で発表することは初めての経験だったようですが、リラックスした雰囲気の中で、自分が創作することで分かってきた「自己」についての質疑応答や議論が盛り上がり、今回の「体感したことを自分の言葉と自分の体を通して表現しなおす」試みは成功だったといえます。

また、特に印象的だったのは、創作表現行為を通して大人である参加者の中にある「子ども」の部分と「大人」の部分繋がってゆくと、彼らの顔つきが変わってきて生き生きとした表情を見せたことです。自分の中の開放的で腕白な「子ども」と自己抑制的で批評的な「大人」が繋がることが、すなわち「頭」と「体」が繋がるということの意味であり、またそのような活動が創造的で成熟した人間を形成することが、見て取れました。個々の学生の中で「頭」(「座学」授業)と「体」(趣味やサークル活動)に分裂しがちな大学キャンパスライフの修正すべき点が分かりました。

私が話すのは以上です。次は、みんなで自由討論をしたいと思います。

# 実験授業ゲスト講師より

## 朗読の授業から

放送表現教育センター講師 岡 摂子

朗読教材 宮澤賢治・作「よだかの星」

朝吹亮二・作 詩「たわしのわたし」

### 1. はじめに

物語と詩を朗読することを通して授業テーマに迫ることを試みました。ここで言う朗読とは、作品を深く読み取り、内容を的確に音声表現することを旨とする Dramatic Reading（ドラマティック・リーディング：山内雅人が提唱）を指します。

### 2. 朗読について

初めての講座に臨むと私は「あなたのイメージする朗読とはどのようなものですか」と問うことにしています。朗読が市民権を得た最近では、「聞いている人が想像をふくらませて楽しんでくれるような読み」という答えが返ってくるようになりました。目指したいのはそのような朗読です。

文章にすると何文節かで説明できる「朗読」ですが、実際に声に出して読んでみるとなかなか難しいものです。そしてまた、夢中になってしまうほど楽しいのも事実です。それは朗読が体をひらかせ、心をひらかせるからです。体をひらき、心をひらいて朗読しなければ聞く人の心を動かす朗読（Dramatic Reading）にはならないともいえます。

朗読の難しさは、文字を習得して以来誰もが日常的にしてきた「文字を声に出して読む」という“あたりまえの行為”を再考することにあります。なにしろ自分流の読みを続けてきたのですから、読み癖がついていたり、学校教育の間では長年、読み間違えないでしかもすらすら読むことが上手な読みだと思われていたり、内容に関係のない情緒的読みをしていたり等、多くの“あたりまえ”の殻を内から落としていくのですから簡単なことではありません。私自身の経験から述べると、長年の殻は、体をひらき心をひらいたとき内から少しずつ新しくなっていく感じです。

### 3. 声を出す～はじめのいっぽ（発声・発音練習）

朗読は文字で書かれたことばを音声言語に換えて表現するものです。私たちが持っている楽器＝声を使つての表現ですから、その楽器＝声を守り、育て、磨きをかけ、よい音色が出るようにしたいものです。それが発声・発音練習です。運動する前に準備体操をするように、声の表現をする前の準備体操だといえるでしょう。

声のでるしくみを考えてみましょう。声のもととは声帯

でつくられます。声帯は二枚の筋肉のひだに向かい合っていてできています。この二枚のひだの間を息が通るとき、ひだが離れたままで門が開いていると「声」は生じません。けれどもひだが近づいてわずかなすき間を吐く息が通るとき、二枚のひだは振動して「声」が生じます。これが声のもとです。

この声のもととは、主に鼻腔・咽頭腔・口腔で共鳴し、声が拡大されます。同時に、構音器官とよばれる舌・唇・歯・歯茎・口蓋などで構音され、さまざまな音声がつくりだされます。私たちが通常「声」とよんでいるのは、外に出された結果のこの音声をいいます。

発声・発音練習はこの発声のしくみにかかわる体の部分をほぐし、きたえてやることなのです。

- ① 声を出す動力になる息の使い方（呼吸法）
- ② 声帯の上手な使い方（口形・顎・舌・唇の体操）
- ③ 声の響かせ方（口形・顎・舌・唇の体操）
- ④ 正しい構音の仕方（発音練習・50音、滑舌）

声は吐く息（呼気）にのせて出すのですから発声の基本は呼吸法にあるといっても過言ではありません。体をリラックスさせて鼻からゆっくり息を吸いましょう。息を吐きながらため息のような声を出し声帯をふるわせ、声が息の流れの中で生まれるものであることを自分の体に問いかけてみてください。声のでるメカニズムの何と素晴らしいことかと、興味がなかった自分の声を改めて聞きなおしたい気持ちになると思います。

### 4. 声で表現する

#### ① 黙読と音読

文字言語に比べて音声言語にはより表情があります。なぜなら、音声言語は声を発する人の気持ちや感情、考え、性格、知識、など多くの要素を背景に音色をとまなつて外に出されるからです。黙読では曖昧に読みとばしてしまえる部分も音声表現ではそうはいきません。感じていないこと、考えていないことは声の表情となつて出てこないからです。声は実に素直なのです。

#### ② 読みのプロセスの中で起きていること

私たちが物語を読む時、個人差はありますが、通常そこに書かれている内容に一瞬一瞬反応しながら読み進め

ていきます。例えば、今回教材とした「よだかの星」をみてみましょう。冒頭のよだかについての細かい描写の部分では、読み手の中によだかの姿が浮かぶことでしょう。浮かび方には個人差があり、なんとなく姿だけをイメージする人もあれば、よだかが生息している環境や歩いているようす・動きなど動画のようにイメージする人もいます。次の場面ではよだかをからかう小鳥達のさえずりが聞こえてきたり、よだかをばかにする小鳥たちに反発したり、よだかに同情の気持ちがいったり、鷹がよだかのうちにやってくる場面では、大声でよだかをおどし続ける鷹の表情が見えるようです。また、からかってよだかをのぞきこむ鷹の息を頬に感じたり、よだかになって必死に答えていたり、なげいたり、悲しんだりもするでしょう。よだかが太陽や星に向かって懸命に訴えるシーンでは、声帯や胸が痛いように感じたり、また、よだかの考えや行動に賛成したり、ハラハラしたり、自分だったらどうするかなど自らと対比したりしながら読み進めるのです。(サルトルはこれを非反省的意識と名付けました)

読解とは、物語の外から客観的に知識に基づいて理解していくように思われますが、実はそうではなく表象を喚起しながら、情感を感じて読んでいるのです。この、物語を読みながら浮かんでくる表象や情感が豊かであるほど、朗読をした時に物語の世界が聞き手に伝わる表現になってきます。

### ③ 朗読することで理解は深まる

今回の授業では、教材を読みながら表象を喚起し情感が湧いてくるようにするために、五感を鋭く働かせて読むよう指摘しました。頭で文字だけ読んでいくのではなく、体全体で(五感で)感じて=体をひらいて、読むことで理解も深まるからです。そして自分なりに理解し感じた通りを朗読してみます。ところが、理解したように読んだつもりでもそのように聞こえなかったり、黙読のときはそう思ったが朗読してみるとどうもその解釈は違うことがわかったり、他の人の朗読を聞いてそうかと納得できたり、逆に少し違うなあとあったり、それらの部分をもう一度確認するために朗読することで、より深い読解ができます。物語の朗読では感覚表象を身体に自由に感じながら読み進め、それらが意識に感動を生み続け、物語の結末で最終的な感動をもたらすことになるの

です。黙読より朗読する方がより大きな感動を生むのは、朗読が心をひらかせるからにほかなりません。

### ④ 自分(心)を解放する朗読

五感を働かせて読み取ったらすぐに聞き手を感動させる朗読ができるかという点と必ずしもそうではありません。例えば、星になりたいよだかが、一生懸命に星に向かって叫ぶ場面では、遠くの遠くの夜空の星に声を限りをお願いしているわけですから、大きな声でなくてはなりません。しかも緊張感もあります。自分の力で願いを遂げようとしているのですから弱々しくではなく、ある決意をもって必死に叫ばなくてはなりません。物語の山場であり聞き手も引き込まれていく場面です。それは頭では解っていても、大きな声を出すことが恥ずかしかったり、無難に淡々と読んだり、上手に読もうとかまえたり、きどったりしてしまいます。そこで思い切って心を解放することが大事になります。思い切って自分を解放し、何度も何度も朗読していくうちに自分とは違う人物、日常とは違う世界を表現する楽しさがわかってきます。朗読することは、音声表現で他へ発信するとともに、表現の中に現れる自分と向き合うことでもあるのです。

短時間の体験でしたが「よだかの星」を朗読してみて、いつもと違う少しひらかれた自分を発見していただけたのではないのでしょうか。

### ⑤ 詩「たわしのわたし」

一方、詩「たわしのわたし」は、たわしとわたしがことばあそびのように入れ替わりながらその中に作者の思想が展開されています。たわし〜亀の子たわし〜亀甲状の体系〜たわしのわたしのパースペクティブ〜分子構造式〜それらの理屈を離れて壮大な想像で楽しませ(ここがすばらしい)、そして自己回帰へ。

この詩を朗読する時、ひとつひとつの言葉に読み手の意味を付与して表現するよりも、作者が与えてくれている言葉のリズムを大切に、読み流した全体のリズムの中に何かを感じる朗読をしてみようと考えました。詩の全体構造をとらえて饒舌に、無機的に、リズムに身を任せて読み、聞き手に考えさせる朗読です。語尾の言葉の重なりがリズムを生み、不思議な世界に誘ってくれます。後日、出席者の創作発表会を見学させていただき、参加者の何人かの方が、「たわしのわたし」から自由に想像

を膨らませ、それぞれの“たわしのわたし”に枝分かれして成長していたのを見てうれしくなりました。いい作品は読み手の心に想像の翼を与える！それこそが体がひらかれ、心がひらかれた結果なのだと実感しました。

Dramatic Reading の醍醐味を十分感じて頂けたのか自信はありませんが、私にとっては大変学びの多い体験でした。ありがとうございました。



# 授業参加者を交えた振り返りと意見交換

手塚（実験授業コーディネーター） まず今日の「振り返り」のセッションは、武藤先生のパッションが伝わってくるプレゼンテーションで、あらためて去年のことを思い出しながら感慨深く拝見しておりました。先生の話にもありましたように、2006年度と2007年度の「体をひらく、心をひらく」と、「アートで体をひらく、心をひらく」と2008年度とを比べて、やっぱり大きい違いを1つ感じました。まずその話からしたいと思います。

まず武藤先生の、初回の授業構成を振り返ってみます。初回では情報を与えて教え込むというスタイルから始まり、回がすすぐとに段々参加者の方が楽しんでいただくような形をいろいろなことを通してやっていただきました。そして創作の心得を皆さんにレクチャーし、最終的には創作をするという形になり、最終回にその発表という大団円が来て、それが4時間、5時間ぐらいいなって最後の盛り上がりを迎えたわけです。

2006年度と2007年度の場合は、いわゆる参加者の方々がそれぞれ創作をして何かを発表するという形よりも、グループ全体としていろいろなことを感じたり、いろいろなことをシェアしたりという感じだったと思います。ですから最後の盛り上がりは、武藤先生の言葉を使わせていただくと、ブレイクアウトであり、私も見る味わう側でしたが、やはりはじけたとい

う感じがしました。2006年度と2007年度でも個々のセッションでは、はじけた部分がたくさんありました。コラージュなどもそうでしたし、ムーブメントもそうでした。しかし2008年度の授業の構成上、最後に創作を発表し、そしてみんなで振り返り、フィードバックをしたり、コメントを出し合ったりすることで、より大きな達成感があったのだと思います。

そうした意味でも、2006年度、2007年度に参加していただいた堀江さん、新井さん、有田先生はじめ何人かの方がいらっしゃいますが、後ほどコラージュを指導していただいた佐藤先生にもコメントをいただきたいと思います。

まず全体としては、すてきな場を共有しながら、プロセスに身を委ねる、プロセスをしっかり生きる、体験することを通して、そういう時間がとても深く流れたような気がします。ですから、そうした意味をふまえ、武藤先生にやっていただいた授業の大きさが推し量られると思います。むしろ2006年度と2007年度と比較して、どちらの満足感が大きいかと言う問題ではなく、それぞれの質の違いから、最後に大団円を迎えるという、そういう先生の構成力が効果を生み、とても感動を味わったのだと思います。

## 資料 A

今回の授業のキーワード：

つ な が る

感じる・聴く・創る－表現・語る・伝える

ゆ ら ぐ



手前：手塚千鶴子氏

それからもう1つは、今回の授業のキーワードなのですが、先生もいろいろなキーワードで、ことに身体知の実験授業の「体験」とか、「参加型」とか、「場」とか、「座学」ではなくとか、「教え込む」とことと「教えない」とこととのバランスとか、「抑圧からの解放」とか、「潜在能力」が発揮されるようなという、実に多岐にわたるキーワードを提示していただきました。

私も2006年度と2007年度をまとめたときにいろいろなキーワードを考えたのですが、今回は「感じる」、「聴く」、「創る」、「表現」、がキーワードになっています。「創る」と「表現」は同じなのですが、「語る」、「伝える」というものがあつたとしたら、そこで一番強調したいのは、「感じる」と、「創る」、「表現」と、「語る」ことです。なかでも「語る」ということは、物語、朗

読で語る場合もありましたし、お互いに語り合うこともありましたが、コラージュで語ることもありました。「伝える」以上に自分が主体、主役になることが強調されていたかと思います。

また、全体を通じてそれぞれの人が自分の中の未知なる自分につながったり、他者とつながったりという、いろいろな種類の「つながる」感覚があるわけです。それが最後の発表で湊さんと山本君のコラボレーションを見たとき、非常に柔らかな面白い形でつながっていたと思います。またそれを見る私たちもその場を共有しながら、そこにいてオーディエンスの何かあるいはオーディエンスを包む何かとつながることもありました。

それから新井さんのコラージュも、ご自分の作品でありながら、銀色のぺらぺらが付いている所などは、それが全部それぞれの人の作品をつないでいたわけです。ですから、いろいろなレベルでつながっていたわけです。また非常に個人的な感想で言いますと、「ゆらぐ」ということです。揺さぶられる、ゆらぐ。ゆらぐというと、やや穏やかな体験ですが、私の個人的な体験では、揺さぶられる体験でもあったわけです。それは何かというと、やっぱり最初の、詩を中心にすえた、武藤先生の最初のセッションに私が揺さぶられたのだと思います。自分の授業とはスタイルが違う。圧倒的な存在感でぐいぐいと教えこんでいかれる、その違うところに揺さぶられたわけです。

また朝吹先生の詩を拝見したとき、実は最初はつまらなく感じておりました。朝吹先生がいらっしゃらない所でこんなことを言うのは失礼なのですが、何か非常に違和感を覚えしました。2006年度と2007年度にコーディネーターをしたときには、各回の担当の先生を誰それをお願いしますということを皆さんと相談しましたが、割合、自分の色で選んでおりました。ですから、ああ、自分が心魅かれないのに、こういう詩にものすごく感動している武藤先生がいらっしゃるのだということで、非常に違う世界をぶつけられたふうで、当初は抵抗感、なじめなさがありました。

それが段々ディスカッションをし、何回も朗読をして面白い、数回のセッションを通じて——しかも最後に新井さんが朝吹先生の詩に応えるような感じで、きちんと自己主張され、そこがとてもパワフルな感じで、コラージュだけじゃなくて、作られた詩の中で自己主張されていたわけです。これはやはり、詩を媒介にしてある種の激しくぶつかり合うもの

があったのだという感じがして、快い緊張感でもあり、とても面白かったので、ゆらぐというか、揺さぶられる体験をいたしました。

#### 資料 B

コミュニケーション：

\*バーバルとノンバーバル

+ 文藝の視点からの身体知しかも、自分ってどこにいるのがテーマなのでやはりバーバルな部分、言語化を促す部分がより多かったのでは。

+ 言葉の隠す力、自分をだます側面も発揮されていたのだろうか？

+ 同時にとても積極的な強い自己主張がされたのが、興味深かった

+ そのために参加者が多かったのか？

+ 「柔らかい」多義性のあるイメージをふくらます言葉と、「硬い」言葉、「切る言葉」と「包む言葉」の使用、父性と母性、男性性と女性性？

\*参加者どうしと、参加者と講師

+ より年齢の幅のある人たちが加わり、その面白さが授業をふくらませまた自分や世界についての気づきを促進したのでは？

次に資料 B のコミュニケーションについてです。私も三田での心理学や異文化コミュニケーションの授業で留学生と日本人の学生に絵を描いてもらったり、グループでコラージュなどを一緒にやったりして、その非言語的表現が気づきや自己理解に果たす役割に魅了されていました。そこで今回の先生の授業では、「自分ってどこにいるの」「ボクってどこにいるの？」という非常にストレートなテーマの授業で、言語化された部分に非常にインパクトを感じました。

2006年度と2007年度の場合にも、もちろん言語化する部分がありましたが、もっと身体に近い部分とか、身体とのコミュニケーションの部分の方がより強調されていたと思うのです。ですから今回、すがぼんさんの作品を見ても、コラージュを見ても、最後の創作を見ても、身体とのかかわりが十分入っておりながら、バランスとして声に出されるバーバルな部分、そしてやりとりの中での言葉の持つ力強さというものを私はあらためて感じたのです。

同時に、それは私自身が感じた違和感ともどこかでつながるのかもしれませんが、言葉が真実を隠す部分、隠したり、自分をだましてしまう部分をも見て、ノンバーバルなものの方がだまさないことにも気が付きました。

それともう1つは、柔らかくて多義性があり、イメージを膨らますような言葉と、硬い言葉というか、切り取る言葉というか、ストレートに切り込んでくる言葉、いろいろな言葉が全体として飛び交っていたという印象があります。それは、言語化された言葉だけではなく、身体を通して表現された言葉もそうだったのかもしれませんが。

詩は柔らかい言葉ではあるけれども、朝吹先生の詩というのは一方で鋭さというか、切るという要素がありつつ、何回も何回も詠んでいるうちにイメージが膨らんでいった、そんな面もありました。朗読を聞いたとき、きっといろいろなイメージがわいてきたはずです。だから、いろいろな言葉の競

演を体験させてもらったかな、そんな感じがしました。

武藤（実験授業コーディネーター） はい、ありがとうございます。今回の授業のキーワードは、「感じる」、「創る」、「表現する」、「語る」、あるいは「ゆらぐ」、「揺さぶられる」、ということですね。また、2006年度、2007年度の授業との違いを、「ブレイクアウト」や「はじける」などのキーワードを使って、感想を述べていただきました。

手塚 私自身の体験では、「ゆらぐ」の部分が強かったと思います。

武藤 はい。それからやっぱり言語的な部分が強かったかなという、そういうご意見だったと思います。どうもありがとうございました。このことについて、皆さんご自由に意見

## 「音」と「空気」の発見

福山 孝子（2008年度実験授業参加者）

今回の実験授業では、様々な驚きがあったが、特に印象に残ったのは「音」と「空気」に関する発見だった。

音 音を想像することは難しい。頭で分かっていると思っていても、実際の音に裏切られる。何度も黙読した今回のテーマ「たわしのわたし」だが、朗読の時間には、まったく違う発見が得られた。ただ声をだして読む、ということではなく、何とか巧く朗読しようとするとき、リズム、速度、息遣い、声の大きさ、声質によって、この作品から、様々な光が発せられ、新しい理解が得られることに気づいた。さらに発表の場での参加者の方々による多彩な朗読は発見の連続だった。また、創作で、私は詩に音楽をつけることを試みたが、そこでも発見があった。詩を言葉に分解し、言葉が要求する音と意味を音楽に置き換え、また複合しようとするとき、本来持っていた（と鑑賞者が考えていた）意味とは別の意味が生じてくる。存在に鑑賞者が気づかなかったのか、あるいは別のものが作り出されたのかは判断できない。しかし、音楽と言葉の関係に、自分という要素を加えて再考することは、とても楽しい体験だった。

空気 パントマイムの授業の中で、見えない壁の表現が、初めは難しかった。なぜ、壁が実際にあるときにはできる自然な動きが、壁がないとできないのか。昔物理で習った、壁にもたれると、壁も同じ力で押し返

すベクトル、この力を、自分のもたれる力と同時に、表現しなければならないのだ、と実演して初めてわかった。2時間のセッションで完全に習得できることは少ないが、自分を取り巻く空気の中に、こんなにいろいろなベクトルが働いているのかと気づくには十分だった。すがぼんさんの模範演技は、自分より、むしろ、自分をとりまく環境、空気の重さを表現して、私たちを想像の世界に羽ばたかせてくれた。

空気あるいは、場の影響力も考えさせられた。特に創作の発表の前に一旦自作を持ち寄り、鑑賞、批評をする時間があったが、これが、考えを深めるのに大変効果的だった。個人で創作するのではなく、他の人と共作すること、同じ題材から得た、ほかの人のインスピレーションを理解し、また、自分の創作に帰するという作業から得られるものは大きい。発表の場の重要性はいうまでもない。自分を取り巻く空気を意識することによって、改めて自分は何なのかを知ることができた。

以上、実験授業で得た音と空気の発見について述べたが、一点、これからの課題にふれるとすれば、一週間に一度という時間配分であったため、授業全体の連続性、集中力の維持が難しかったことである。この授業で得た発見は、自分の中で次につなげて、これからの勉強でも身体知を実践してゆきたいと考えている。



武藤浩史氏

を言っていたきたいと思います。今回は私もある種の確信的に自分の色を出すというか、悪く言えば勝手にやったわけですが、2006年度、2007年度にご参加いただいた方から、何かご意見をいただきたいと思います。

私の印象では、2007年度までやっていらっしゃった方は、最初ちょっと戸惑われたのではないかなという気が致します。有田先生、いかがですか。

**有田（実験授業参加者）** 私は、東京の多摩市で小学校の教員をしています。今も5年生の担任をしています。2006年度、2007年度と最初から参加させていただいており、今年で3年目になります。最初のときお話したかもしれませんが、今年は私にとってはちょっと難しいテーマでした。難しさが何かなという、やっぱり言語だったと思います。言語というのは結構抽象度が高い。身体というと土台みたいな所であり、そこで勝負できる所があるのですが、私は数学が専門であることもあり、言語が非常に抽象度の高い記号だと考えるため、かみ合うようできてかみ合わないことが結構あります。

その言語の中で、本音とか本気をぶつけようということが、とても難しい作業だなということをあらためて感じました。私は現場で子供たちの本音と本気をどう引き出すかということをして1つのテーマとして、30数年間教員をやっています。先程どこまで教え込むかみたいなことがありましたが、最終的には本音や本気をどうやって引き出して、彼らからその顔を見られるかという、それはどんな教科をやってもそうなので、言語を通してやるというのは非常に高度な作業になると思いました。だから難しい。今回はやっぱり、言葉とし

て知のレベルにまで引き上げるということが非常に難しいことがよく分かりました。

**武藤** ありがとうございます。いまのご意見に対して、何かご質問はありますか。

**湊（実験授業参加者）** 「知のレベルまで引き上げることが非常に難しい」というところを、もう少し具体的に教えていただけますか。

**有田** 私は専門家ではないので、よく分かりませんが、身体知の知のレベルと、身体知の中の言語を介しての知のレベルというのはちょっと違ってくるような気がしたものですから、もしそうなら難しいということです。本音の交流という意味では非常に難しい作業になったかと、そういう意味です。

**湊** ありがとうございます。

**武藤** 言語を今の言語学で言えば、言葉の身体性みたいなことを認知言語学の方では言ったりします。また精神分析などでは言葉を用いて、ある種の無意識の方にいくという手法もあります。では言葉というのはいったい何なのか。非常に抽象的なものなのか、それとも具体的なものなのかという、難しい問題です。それぞれの感覚というのは違うからです。そういう意味から、今の発言は大変貴重なものではないでしょうか。このことについて何かありますか。

**伊藤（実験授業参加者）** 手塚先生の資料Bの中にある「コミュニケーション」についてですが、さっき仰った言葉の抽象性とか、多義性とか、僕好みの言葉がいっぱい散らばっていたものだから一言発言させていただきます。

僕が何かを文章で主張しようと思ったとき、一義的というか、意味が確定してしまうものよりは多義的であいまいなものを使って、自分を主張したいと思うわけです。しかしそれを直接的に言うのではなく、ごまかしてしまいます。主張はしたいのだけど、あいまいな言葉をいっぱい連ねて隠してしまう。

それが分からない読み手にとっては、いろいろな所がぼけてしまうため、結局作者の意図した所は分からなくなる。そこが面白いのかも知れない。何か作るときに自分の意図が

相手に分からないように、本当はものすごくネガティブな内容を言いたいだけでも、でも一見するとそうは取れないとか、そう言う所が面白いと思います。

僕はアルバイトで塾の講師をしており、小学生に国語を教えているのですが、言葉の抽象度、小学生が問題に答えるときの抽象度ってすごいと思っています。――問題の抽象度と自分の答えの抽象度を合わせるというのは難しいと思うのです。例えば架空の問題ですが、ケンジ君とサトシ君は仲のよい友達だったと答えるのと、ケンジ君とサトシ君はいつも一緒に遊んでいた、と答えるのでは違います。いつも一緒に遊んでいたというレベルと、友達という概念を持ち出して答えるレベルとでは、抽象度が先の答えの方が一段階上になります。どちらの答えの方が、その問題に対してふさわしいのか。これを教えるのは難しいというか、言葉って案外不自由なものではないかとさえ思えます。

武藤 ありがとうございます。さっきの手塚先生の仰った、言葉の隠す力という部分ともつながってくるようなご意見であり、同時に面白いテーマですね。言葉というのは、例えば日

本人ってとても遠慮する国民性がありますよね。何かものをもらうとき、「いや、とんでもない、とんでもない」と言いながら、実は何か別のことを表現している。「もう1回言ったら受け取りますよ」というように。

口説かれるときも、そうです。「いや、だめよ」と言うけれども、「もう1回言われたら行くわよ」というような。それと同じで、コミュニケーションには必ずそういう所があって、言葉というものは何かを隠しつつ表現します。隠すというのは単に表現するということの裏側というか、対立ではないですね。それは、それこそ精神分析がよく示す所です。

それからもう1つ。特に芸術言語、詩なんかを見ていて面白いのは、最初は何か抽象的な表現かと思ったものが、ある所で非常に生々しいものとして伝わってくる。私は文学研究者なので、言葉というのはむしろ有田先生とは逆で非常に生々しいものなのです。その生々しさの強さと洗練というものを共有したいというか、学生たちにも伝えたいという気持ちがとても強くあります。

今の隠すことと表現すること、抽象的であるということと生々しいことって必ずしも対立する問題ではなく、ある現象のこち



らから見ると抽象的だけど、向こうから見たら生々しく見えるとか、同じ事象でこちらから見ると隠しているけれども、向こうから見ると表現しているということが沢山あります。今のお話を聞いて、そんな感じを受けました。では、せっかく講師の方々もみえておられますので、佐藤さん、何かコメントをいただけますか。

**佐藤（2008 年度実験授業ゲスト講師）** 今、武藤先生が仰ったことを少し受けてお話します。私は武藤先生の一昨年の『チャタレー夫人の恋人』を用いた実験授業のときに衝撃を受けており、それで今回はあまり違和感なく入れました。もともと私自身は言葉が苦手で、普段自分が心理療法をやるときはアートを使ってやっているのですが、自分がカウンセラーとして成長していく段階でやっぱり言葉から逃げていたという部分がすごくありました。

子供がやっていること、目の前の患者さんがやっていることを自分の体で感じて、それをどういうふうに戻すかということはずっと考えてきたわけです。言葉がないと返せない、という問題に突き当たったりしました。そのときに当時の私のスーパーバイザーに、「言葉を磨け」ということを言われたのです。

今回、武藤先生のこの流れというのは、言葉1つであいま性もあれば、ものすごく生々しいものでもあるということ、私も自分の仕事の中で感じている所です。その言葉と言うものを、こういう題材の流れの中で表現して来たということとはすごいことだなと思っています。

私は身体知の中に臨床的なものを感じていて、1つの言葉で例えば人を殺すこともできるし、その人を癒すこともできるし、楽しませることもできるし、悲しませることもできるということを、今回体験できて本当によかったなと思いました。

今の言葉の問題に戻りますが、以前の文学実験授業では、武藤先生が訳された『チャタレー夫人の恋人』を読ませていただいて、今回『たわしのわたし』だったのですが、すごく両方に共通点があり、それが何だろうとずっと考えながら来たわけです。そこで思い至ったのは、やはり両方の描写がすごく美しいということです。ある意味、生々しい所がとても印象的でした。

もう1つ頭の中に描いていたのは、うまく表現できないのですが、現代アートのような感じを受けたことです。現代アートを深くは分かりませんが、少しかじっています。ちょっと理解できない所もある上、言葉では表現できませんが体が感じ

て、「あ、こういう世界なんだな」という程度には理解しているつもりです。

と同時に、講師をさせていただいているという面で、先ほど先生が仰っていた、どこまで教えていくか、どこまで伝えていくか、という問題を考えざるを得ませんでした。やはり提示の仕方に関し、私も2006年度のときのコラージュのやり方と、今回2008年度のやり方は変えてみました。今回は「コラージュとはこういうものですよ」と少し話をしてから入ったわけです。どこまで提示するか、実は1つのテーマだったのです。

2006年度のときは、「まず作りましょう」と言ったような記憶があります。何かその辺りで自分の姿勢の違いというのでしょうか、同じコラージュというテーマをいただいてこれだけ変わったということは、ここに流れているものに対して「私自身の捉え方に変化があつてそうなったのかな」ということを実は感じている所です。

**武藤** 「そうなった」って何ですか。言語化できないものですか。

**佐藤** あえて言語化すると、そうですね、自分で何か、もう少ししゃべってみようと思ったことです。私は自分の授業のとき、ほとんど資料を作りません。その場で話すやり方です。流れも、例えばこの時間は最初に何々をやると言うのですが、学生とのやりとりの中で授業が変わっていつてしまうのです。

ですから、最後の出来上がりもまったく違ってしまいます。今回はこういうものです、というものを描きました。例えば「私」と書いた紙を作ってくるとか、こういうことは私にはあまりなかったことです。また武藤先生とのコラボレーションもすごく考えたことの1つです。

**武藤** ありがとうございます。私は確かにスタイルで言うと、ある種の方向性は最初に打ち出したいというタイプだと思います。そのことを理解されているようで手塚先生や佐藤先生はとても人の話をよく聞いてくださるというか、受けが上手で、「こう来たらこういうふうを受けよう」みたいな受けの方々です。私はもう少し、攻めのタイプかなという気はするのですが。

ですから、それは「どこまで教えて、どこから教えないか」という話ですけど、これは学生の方の立場から言うとどんな

感じなのでしょう。例えば今回、「もっとこういうことを教えてもらいたかった」とか、あるいは逆に「ここは俺たち自分で勝手にやった方がよかったのに、こんな話はもう余計だよ」みたいな所があると思うのです。ですから講師の側から見て、「どこまで教えるか、教えないか」というテーマが生まれてくるわけです。

それは、ある種の間をつくりたいという欲求であり、参加者それぞれの力がフルに爆発するような間をつくりたいわけです。そのために、参加者みんなの様子を見ながら判断しているのだと思います。教えられる側は、どんな感じがしますか。

**宮城(実験授業参加者)** 全体を通して今感じたことは、ちょうどいいぐらいだったと言う印象です。最後に異空間をつくれたと思います。例えば創作の間がつくれたのは、最初にインプットから始めて、それを徐々に減らしてゆき、自分が感じるままをやってみたらだと思えます。その方法が功を奏し、後半には今まで受けてきたものをすべて爆発させることができ、自分のやりたいことというのを徐々に見付けられるような環境が作れたと思います。

このことをこれからどこに落とし込むのか、また今日の体験が最善の方法だったのかというのはこれから実験というか、落とし所が見付けられるような気がしています。「もう少しインプットの部分を増やしてみたらどうだろう」とか、「中盤ぐらいからアウトプットもさせてみたらどうだろう」ということも考えています。

**武藤** 君たち、次に実験授業を受けるとしたら、どんなものを受けてみたいのかな。

**宮城** 最初に取りあえずやらせてみるというパターンでやって、次の回からは今日のようなインプットを増やしたり徐々に減らしていくというやり方をやってみてはどうでしょうか。初回にアウトプットをやってみる、インプットを経てからアウトプットをする、という比較をするのも面白いと思います。

**堤(実験授業参加者)** 私も今回は、ちょうどいいと思いました。第1回のときはすごく難しい内容で、ほとんどついていけなくて、「どうなることかな」と思っていたのですが、今回、自己ワークや自他ワークをしたときにはよくわからなかつ

たのですが、しかしそれらを経て、パントマイムなどをするにより、「あ、このことだったのか」と新しい何かを感じることができました。2人で一緒に1つの作品を作ったときやコラージュのときに、中島先生が以前に仰っていたウエハースをはがすときの自己の話を思い出したりしました。

それで神経というか、自己があるような感じのお話をされたことを、コラージュを一生懸命やっているときに、あ、今何かここに自己があるみたいな感じのことをぱっと思いついたりしました。そういうわけで最初にある程度の方向性を与えてくださるというのは、私にとっては有効だったと思います。ことに一見かかわりがなさそうな所で勝手に思い出したりしたことにより、最後の振り返りの会で種明かしという感じも得ることができ、すごくよかったなと思いました。

**武藤** 中島さん、その節は大変貴重なご発言をありがとうございました。これに絡んで何かありますか。

**中島(身体知プロジェクトメンバー)** どの点ですか。ウエハースですか。



武藤 ウェハースのあの意識って、中島さんの非常に大切なテーマですね。今ここで全体の説明をしていただいたのですが、何か絡んできますか。

中島 あのかは、僕自身は「こういうことをやっていますよ」という話をしたわけです。「立ってください、ほら、主体がここにあるでしょう」という説明よりも、実際にものがあるってそれとどうインタラクションするかという、主体が一番移動しやすいのでそちらの方が分かりやすいかな、という思いがあったからです。

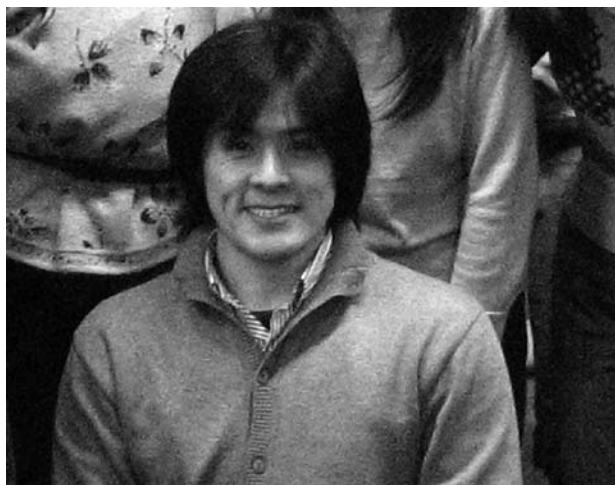
武藤 だから、おそらくそういうことが、つまり初回の僕の話とか中島さんの話とかが、後になってコラージュやパントマイムの回で、今の堤さんの話によると、「生きてきた」「つながってきた」ということであり、それは、私としては非常にうれしい話なのです。

それでは、パントマイムの回のすがぼんさん、今振り返ってみていかがでしたか。

すがぼん（2008 年度実験授業ゲスト講師） シャベリ慣れないので短い話になりますが、僕の回と発表の回以外は見ていないわけです。それで最初どういう方なのかとか、どのぐらい伸び率が上がったのかというのが分からなくて、僕はどれだけ役に立ったのかということをすごく不安に思っていました。しかし、今お話を聞いて、少しでも方向が変えられたようで、すごくうれしく思っています。逆にお聞きしますが、コラージュとか、あのような発表みたいなことはこれで3年目なのですか。

手塚 いわゆる全員が一人一人で作成したものを、最終的な作品として発表するのは初めてです。みんなでコラージュやグループコラージュをやったり、それから連句をして歌を作ったりという、そういう意味での創作はもちろん今までにもやっていました。しかし全体を通して、ああいう形で一番最後にやるという場はありませんでした。

すがぼん 皆さん、すごい。完成度が高いというか、ちゃんと形になっていたということにすごく驚きました。



すがぼん氏

武藤 どうもありがとうございます。ほかに今までの議論の流れで何らかの形で介入したい方、いらっしゃいますか。

では、横山先生、コーディネーターの1人として、ご発言をお願いいたします。

横山 今回、武藤先生にお願いしてコーディネーターをやっていたわけですが、実は私自身もドラマをやっており、正直申し上げまして私の場合は最初にインプットしても、そのインプットの意味が自分でもよく分からないときがありました。つまり、思い通りになったことが、1回もないからです。もちろん自分がやる時も、インプットは一生懸命やります。でもそれが、思ってもいない方向に行くということを、6年間、英語のドラマを作ってきて経験しています。

ところが不思議なもので、人間というのは言葉の力とか、思考能力などで生きているのだと思うのは、とんでもない方向に行ったときにもう一度そこで軌道修正をしたり、とんでもない方向に行ったかと思えば、また別な方向に行き、結果的に思っていた通りになったりするので。

それをずっと経験してきて、そこに時々不思議なものを感じるのです。というのは、とんでもない方向に行ったとしても、最初自分がしっかり考えてインプットしておく、後でそれを追い掛けていくことができるし、あるいは時々インプットした所で学生たちがそこで道を見付けていくことができる。最初のインプットで、「あっ、ここがある意味では目的地だったのかな」というときがあるのです。

そうすると、とんでもない方向に行ったときに、取りあえず





授業最終回の発表会

もう1回あっちの方に行ってみようということで、そこが目的地となって、もう1回はまってくれたりすることがあるような気がしています。それが教えるということだし、それが身体のような気がします。

人間というのはすごく不思議な存在で、私は身体にはやっぱり感情があって、さっき中島さんのウエハースじゃないけれど、自分だけでなく相手を見ながら「ひやひやひやひや」するわけです。そこには、ほぼ自分を取り去っている所があり、そうすると最初自分はこうだと思っていた自分も、相手によって変わっていくという所があるような気がするのです。

これが教えていることの身体性だと思いますし、この感情の動きというのは体で感じていくものです。心臓が痛くなったり、胃が痛くなったりすることです。ここにもいらっしゃる美千花さんや、杜季女さんや、すがぼんさんだって、そういうことを経験しながらそれを身体化しているような気がしますし、教えるということも結構似ていると思うのです。

ただ、それを経験する場というのが、教員もほとんどありません。言いたいことが伝わっているか分かりませんが、教えることの身体性についてです。それを私が一番思ったのは有田先生の所に行き、6年生の生徒を教えたときのことです。私が思ったことと、まったく違う動きだったからです。いかに自分が例えば大学生というものに縛られているかとか、そんな衝撃がありました。

ただ1回失敗したら、次にまたやりたくなるものです。そうやって体で覚えていくものだと思います、教えるということは。ですから、また有田先生の所に行ってやってみたいと思っています。

面白かったのは、そのときは失敗だったのですが、一緒にいてくださった先生方でも3年生の子とか、2年生の子だとやっぱり全然違う動きをすると仰るのです。ですからこの身体知の実験授業も、私たちはいろいろなやり方で続けていきたいのです。

もう1つは、例えばここに芸術家の方もいらっしゃいますが、芸術家の方々にとっては今日のようなセッションは全然違うことをやっていると思われるかもしれませんが、実はこうした中で一緒に見付けていきたいという気持ちがとてもあります。そういう気持ちがあって、この身体知の実験授業をやっている部分があります。実はインプットが正しいのか、アウトプットが正しいのかというのは、これは相手によっても変わってくる。その結果、自分たちが思ってもいない方向に行ったりして、おそらく教えているときに、「あ、こうやって私たちを導いてくれたのだな」というのは大嘘だともあります。ただ、それをどんどん積み重ねていくことが教える中では大切で、それが身体知なのではないかという気がしています。以上です。

湊 お聞きしたいのですが、今、横山さんは最初にインプットのことから話し始められた。そのインプットというのは、具体的に何をイメージして仰っていたのですか。つまり、授業で教員として伝えたいこと、それから押さえておいてもらいたいこと、共有しておきたいことを提示するということを指してインプットと仰っているのでしょうか。

横山（実験授業コーディネーター） この答えが正しいかどうかは分かりませんが、何かを教えるときにその目的というものをどうしても提示しなければいけません。つまり、ここ

「自分」を知り「自分」と付き合う  
～「他者」との関係性の中で～

山本 理（2008 年度実験授業参加者）

今回初めての参加で、想像以上に刺激の多い充実した2ヶ月間でした。普段の学生生活ではなかなか得られない要素として、幅広い世代・層の方々が集まったことにより幅広い多様性に触れられたこと、これでもかと言うほどアウトプットの機会があったのはこの授業の最大の長所だったように思います。

前者の多様性についてですが、モチベーションの高い学生たちや社会人の方に外国人の方（佐藤先生の奥様）、既に退職された方など普段は接する機会の少ない方々と出会い、彼らとお互いの全てを曝け出して披露しあうというある種異様な時間からはたくさんの発見がありました。多様性を通しての発見としては誰ひとりとして同じ人は存在せず、十人いれば十通りの自分がある、ということでしょう。「十人十色」なんて当たり前という方もいるかもしれませんが、本当に他者との違いに触れる機会が減ってきた今の時代、自分と全く違う他者と触れ合うことの意義はとても大きかった気がします。

後者のアウトプットの連続による発見としては、自

分の表現には必ず自分の今までの蓄積が現れるということです。裏を返せば、表現することによって今まで自分が得てきたもの、つまりは今の「自分」を知ることができるということですね。僕は自分で考えてそのまま自己完結してしまう癖があったので、今回の講座を通して自分の思ったことや感じたことをとにかく外に出してみることを意味を教えてもらったことはとても大きな収穫でした。

振り返り会にて中島先生にお話を伺ったのですが、人間は長所と短所も表裏一体で、全部引くくめて自分という存在をよりはっきりさせるためには何かアクションを起こさないといけない、と。アウトプットが先でインプットが後。そうすれば欲しいものが体の中になだれ込んでくるが、この順序が逆だと平凡なものしか作ることとはできない。他の参加者の生徒さんによれば、インプットとアウトプットは血液循環のようなもので、人は入れたり出したりするのが一番自然な行為なのだからインプットもアウトプットもバランス良く必要なんだということ。

に行くためにこれをやるのだとか、これをやることにこういう意味があるのだとか、それだけではなく、しかも身体ではなく、どうしても私たちには哲学的な意味も必要なのです。だから文学作品だったらこういう読み方があるとか、こういう研究があるということを、自分の中で整理しておきたいわけです。そういったものをもって、目的地に行くのだということを提示するということはある。どうしてもそれを、私はやりたくてしまうのです。

湊 自分の中にある、構図みたいなものを見せておくということですか。

横山 そうです。それを一応みんなに見せておきたいという気持ちがある。ただ、仰る通りで、それはまったく分からないと思われることが多いのです。学生にとっては。自分もやってみて初めて、「あ、この人がこういうことを言ったのはこういう意味があったのだ」と分るのは、体を動かして分かることが多いのです。だからインプットとか言いながら、私の場

合、実はそのインプットにはあまり意味がない。ほとんど生半可の知識ですが、それを学生と一緒に動くことで自分も同じように、「こんなの嘘だ」と思ったり、分かったりする。

湊 動くということは、劇という表現にまとめていくとか、作っていくということですか。

横山 1つはそうですね、劇でなくてもいいのです。ただ、何かの形で体に落とし込むという作業は、どうしても必要だと思います。教えるときには。

湊 もう1つ。6年生にしたというのは、6年生に何をしたのですか。英語の授業をしたのですか。

横山 そうです。英語の授業です。私はこう思ったのです。6年生だからもう自我意識がすごく強いだろうと、最初にインプットから始めたのです。ところが、それはうまくいきませんでした。本当に。つまり、英語ってどういう所でしゃべって

いるのだとか、そういう所からインプットをしてみました。これは有田先生が仰ったように、体で出てくるのです。空気で。

あと、そういった子供たちがどういう動きをするのかで、すべてそれが判断されていくのです。そこはやっぱり小学生なのです。

有田 一言言います。私が6年間で1年間だけ持ったクラスなのですが、実は大変なクラスでした。学級崩壊状態のクラスを私が受け持ち、それで学校側も横山先生にやってくださいとお願いしたのです。普段の授業でも、やっと席に着けるようになってきたという子供たちです。ですから慶應の学生のレベルとは全然質が違います。当然インプットの意味を、知的に理解しようという子供たちではない。

横山 もうはっきりと、顔や体に出ているのです。座り方1つ見ても。

手塚 それは大学生でも同じじゃないですか。

横山 そうです。でも、ここで私は本当に勉強させられた。その夜、高熱を出した。そのとき以心伝心で、その授業が終わった途端になぜかしら武藤先生から電話が入った。そういうものののです。身体知の授業のことで武藤さんが電話をかけてきたのです。

手塚 相談ですか。

横山 相談です。大学のことの。だから、何か全部リンクしてしまい、開口一番、「失敗したよ」と言いました。覚えていないかな。

武藤 私の態度が悪いとか、そういう話じゃなくて。

横山 違う、違う。

湊 最後にもう1つ聞きたいのですが、先程、身体知についてのお話がありました。感情だったり、あるいは体にいろいろ出てきたりすると仰ったのですが、例えば高熱が出たときの感じというのがあります。何ていうのかな、ジューシーな

感じというか、高熱の独自の感じとか、感覚とか、ちょっと言葉にしづらいのですが、身体知における身体感覚とはどんなものなのでしょう。

横山 ちょっと違うかもしれませんが、私は高熱を出すってこと、実はすごく好きなんです。1年に1回は高熱って出すものだと思っています。そうじゃないと健康じゃないような気がする。でも、あのときは本当に知恵熱だったと思っています。

今回すがぼんさんに頼んだのも、横浜市の方で小学校に芸術家を送るというので、そこで私はたまたまそのシンポジウムを聴きにいていて、彼が小学生を教えている。そのすがぼんさんの話し方とか、先生の話聞いていて学びたいなと思わせるものがあつた。これは、「何なのだろう」と。そして私はいろいろな意味で、あのとき高熱を出したことをこのシンポジウムで、ふっと感じてしまった。

それはすごく気持ちがよくて、人間というのは正直に答えてくれるのだと思った。つまり、大学生というのは乙にすまして、分かったようなことを言うのだけれど、小学生というのは本当にもう正直なのです。それに「してやられた」という、すごく気持ちのいい敗北感があって、「うんうん」うなりながら熱を出している。それもまた気持ちがいい。

武藤 話がマゾヒズムの問題に移っていきそうなので(笑)、ひとまず止めて、要するに学生にインプットを試みるけど、それが思い掛けない展開になって、それが何か悩みであったり、楽しみであったり、そういう話なのだと思います。それから学生に教えていく過程で何か自分もそこでいろいろ気が付いて学んでいくという、2つの問題が議論されていたようです。

横山 はい。つまり、教育の原点に戻った感じがしたので、小学校で。これはやっぱり、忘れてはいけなかったと思います。

武藤 この問題はすべての教師にとって、身につまされるような話なのではないでしょうか。あるいは学生の中でも塾で教えている人とか、会社で部下のいる人とか、そういう人もみな同じだと思うのですが、何かご意見はありますか。

中島 熱は僕も好きなのですが、僕はどっちかというと絵ですね。人の作品を見たときに、無意識がもろに出ちゃうので

す。普段はとても温厚そうな人ほどすごいものを描いていて、それがうつってしまうのです。それはもう画廊とかに入った途端に、「やばいぞ」と。

手塚 自分にうつっちゃう。感染しちゃう。

中島 ええ。転移するとか。だから、すぐ出られればいいのですが、たまたま知り合いだったりすると5分とか、10分とかいなければいけない。そうすると、その晩、寝込んでしまいます。頭が痛くなって。そういう体験があって、だからこの回もそういうものを引き出すものがあるとしたら、僕は命懸けだなと思っていました。するとみんなのとんでもない無意識が出てきて。作品って出ますよね。結構怖かったのですが、でも全部参加しました。

言葉の問題でもさっき仰ったような、柔らかい多様性のあるイメージを膨らませると、こちら側の方に芸術言語が生まれてくると思うのです。歌としての言葉というのは、初めに与えられる意味とか、テーマとか、「これを解釈しなさい」とか、そのレベルのものだったら別に何も害はないのですが、自己と他者というテーマの場合は、他者をリアルに表さないと絶対自己問題はリアルに表れてこないで、その場合の硬い言葉というのは結局何かを伝達するための手段としての言葉なのだと思います。しかし柔らかいイメージ言葉というのは、何かを表現する媒体ではなく、それ自体が転移してくる。言葉自体が乗り移ってくるとか、絵の構造が乗り移ってくるとか、そういう別のものだと思っています。

今、先生が仰ったように、柔らかい言葉、詩で考えるという作業に行かないと、やっぱり硬い言葉に戻ってしまう。解釈に戻ってしまうような所があって、それは安全弁なのですが、でも、それだと本当に他者というのは表れてこないのではないか、と思っています。いったん逸脱して拡散して、それで自分の中で何となく最後に自動的にまとまってくるというような、そういうものが出てくると僕は怖いのですが、でもその方が楽しいような気がします。言葉に関しては、そんな感じです。

武藤 ありがとうございます。湊さん、新井さん、福山さん、この辺りのテーマで何か爆発しそうな予兆はありませんか。爆発系のお三方がそこに並んでいるというのは偶然じゃない

ような気がするのですが、どうですか。

福山（実験授業参加者） 私は、創作が本当に楽しかったですね。当初、この授業のどこに集中したらいいのかが分からなくて、1週間に一度ということもあり、集中力が欠けてしまうとか、どうやってのめり込んでいけばいいのだろうという部分がありました。しかし創作をするという所に来て、今までのものがインプットだったのかということは私には感じられませんでした。とにかくすごくよかったと思います。

詩って、こういうものだったのだという発見があって、「ああ、すごく楽しいな」と。それで、自分自身でやろうと思ったときに、理解の深まりがすごく感じられました。その後に歌をやるということが創作の前段階、準備段階のときに出たのですが、私の中では全然違ったものを感じていました。

私は音楽を少し勉強しましたが、自分で作曲はやっていなかったの、今回は気合いを入れて創作してみようと思い、突き詰めて理論的に自分の中でできるものは全部やってみようという形でやってみたわけです。そうしたら、今まで言葉で創作をしようと思っていたときは全然違う、自分の中でのそれこそ爆発があって、「こんな体験ができる所はないな」という思いがあり、感動したのだと思います。

できた作品がどうこうというよりは、自分の中で、ああ、本当にこういう自分がいたのかという、その発見が素晴らしいかったですね。私は4回参加して、5回目に創作の準備があって、6回目が発表会という形だったのですが、4回目から5回目の所で何か自分の中ですごく膨らむものがあり、創作という素晴らしい体験をすることができました。

武藤 そうすると、福山さんご自身の体験の中では、何かインプットがあって創作で爆発したということだけではなくて、創作をすることで、かえって作品の鑑賞力が目覚めたということでしょうか。

福山 そうですね。そう思います。ただ、後で考えてみると、人前で歌を歌おうというような気持ちになれた。それは準備がなかったら、突然「さあ、集まりました、さあ、歌いましょう、あと2週間後にやってください」と言われても、それはとても出てこなかったと思います。

5回参加した中で、例えばパントマイムという体を使ってみ

んなの前で、恥ずかしいと思いながらやってみて、もう恥ずかしいとか言っている場合じゃないぞ、という気持ちになった所で出てきたものだと思います。

武藤 やっぱ、すがぼん効果。

すがぼん ありがとうございます。うれしいな。

武藤 ありがとうございます。新井さんはいかがですか。あのコラージュ、すごく乗っていましたよね。ご自身を振り返ると、あれはどんなものだったのですか。

新井（実験授業参加者） 2006年度の身体知の実験授業のときに、佐藤仁美先生の授業でコラージュをやらせていただきました。そのときにコラージュの楽しさに目覚めたという感じなのですが、今回は武藤先生のコーディネートによる『たわしのわたし』（朝吹亮二）の詩を聞いて、「非常に面白いな」と感じまして、最後に創作でコラージュを作ってみようと思いました。今回は皆さんの作品を自分の作品の中に取り入れています。『たわしのわたし』という詩の中にも、巨大な緑のたわしの大樹というイメージがありましたが、（生命感溢れる）そのことを皆さんの作品を取り入れることで表現できるのではないかと考えたのです。

コラージュを作るだけでは、自分のイメージをなかなか伝えられないのではないかと考えていたときに、お隣の（福山）孝子さんの散文を聞き、その中にやはり『たわしのわたし』のイメージが入っていました。それが詩を作るきっかけになりました。そういった全部の回の身体知の授業を取り込むことで、作品ができていったという感じがしています。

すがぼん先生の授業のときに、首を動かす動作を教えてくださいましたのですが、すごく身体知らしいなと思いました。体の内部からの動きを観察しながら、さらに自分の内部でどういうことが起こっているのか、ということを考えながら表現するというのが面白い体験でした。インプットとさらに自分の感じを外にアウトプットしていくという、その感じが非常に面白かったですね。

武藤 これも、すがぼん効果ですね。



授業最終回の発表作品

堤 もう1つ、今日、すがぼん効果を実感できる瞬間がありました。私は慶應義塾大学の湘南藤沢キャンパスに行っているのですが、体育の授業が必修で30回出席しないと卒業できません。その中にスキューバダイビングやゴルフの授業があり、実はアルバイトで人力車を引いている私には一番縁遠いクラシックバレエという授業もあって、今日思い切って参加しました。

そのとき、私のことを先生は分かっている、私の隣でずっとやってくださったのですが、身体知のように足が上がりません。みんなは上がっているのに、自分だけはここまでしか上がりません。鏡に映った自分と、足がしなやかに上がるみんなという、相手を見ながら自分の体について、はっとさせられてしまいました。卓球ではなくて、どうしてクラシックバレエにしたのかは、そういう下積みがあったというのと、それをやってみて、そこで何か「はっ」と思い、「あ、すがぼん効果だ」と思ったのです。何か確実に蓄積されていっているものがあるのだな、というものを感じました。

すがぼん ありがとうございます。

堤 それに併せて、今の話を聞き、私の中で思ったのは、私にとってインプットとアウトプットというのは血液循環みたいな感じだと思ったことです。それを思ったのは、私は今、文章を——もともと文章を書くのが苦手で、それで文章を書くゼミに入って最初はコラムを書いていたのですが、今は小説を書くに至っています。そんな中で1回書いてみると書けたわけです。それはとても不思議で、一気に2万字ぐらいの小説が書けていました。

でも、ある瞬間、泉が乾いたように書けなくなってしまったのです。私はメモをとる癖があるのですが、本をただ読むだけでは自分の中に蓄積されないということに気がきました。

本を読んで気に入った個所をメモしないと体に落とし込めないという自分に、この授業で気がきました。

それに気付いて、今まで文章を書くこともあまり好きじゃなかったし、本を読むことも好きじゃなかったのですが、本を読み活字を自分に入れて血液循環させなければいけないという欲求に駆られて、本を読みメモがたくさんできたときに、また文章が書けたわけです。アウトプットとインプットは、私にとっては血液循環です。

それと私は絵を描くことが好きなのですが、絵を描く自分はツルの恩返し状態で、描いた後はもう疲れちゃって倒れてしまうような感じになります。でも、ある日描けなくなる自分

#### 身体知実験授業に寄せて

中島 智（武蔵野美術大学非常勤講師）

いわゆる座学において排除とまでは言わないまでも捉え損なうものがある。それは諸学問を創造的に飛躍させる重要な要素でありながら、ひとつの学知が「体系」として成り立つうえで便宜的に篩いにかけられてしまうもの——、すなわち「非合理的要素」である。

社会学者の作田啓一は著書『生の欲動—神経症から倒錯へ』（みすず書房 2003）のなかで、象徴化・分節化できないレベルにある自己を「真の自己」もしくは「裸の自己」と名付けた。そしてこのイメージの外部にある自己と有縁性をもつ他者として「大他者」というものを仮説している。もとより、この「裸の自己」や「大他者」は社会的自己によって表象することは不可能なものであり、ゆえに非合理としてしか現れえない性格をもつ。とはいえ、この「裸の自己」の回復はごく典型的に芸術体験やスポーツなどにおいて実現されているものなのである。

例えば、ある論理体系はその論理の内部からその論理体系自体の真正性を証明することができないように、自己認識においても自我世界における他者（鏡像）との共犯関係内部にとどまっていた「真の自己」を体得することは不可能となる。作田啓一は「自我からの離脱」や「自我の喪失」において「大他者との遭遇」がなされると述べ、これを「溶解体験」と呼んでいるのだが、この働きを有史以前からひとつの「知」として伝えてきたのがアート（技芸）なのである。技芸においては象徴を記号へ回収してしまうのではなく、象徴界に現れるさまざまな事象を通じてその顕現（選択）をささえている潜在的な多元性へのありとあらゆるコ

ンタクトが試みられてきた。

身体知とは、そのような諸々の技芸知に残存している「知」もしくは「非知としての知」や、イメージに化されていく体系化・表象化によって取りこぼされてきた「非合理的要素」を、人間の学において（または自己において）回復していくための視座と言えるものであろう。身体知実験授業のタイトル「体をひらく、心をひらく——ボクってどこにいるの？」にも自己（他者）にかかわる問題意識が表明されているように、実際オリエンテーションにおいても表象レベルの「自分さがし」が陥らざるをえない矛盾（自家撞着）から解き放つための“揺さぶり”がこのプログラムの起点を成していたし、そのアプローチの（横断的にならざるをえない）複眼性にも深く共感を覚えた。

冒頭で述べたように近代的学校システムにおいては情動・軀動を情操・体操へと目的合理性のうちに閉じ込めていく傾向があった。換言すれば、それは人生や学問におけるクリエイティヴな回路の生成や再編成の「場」をひらく場としての学校においては一種の禁忌として隠匿されてきた問題だった。このことはアート系専門大学においても例外ではない。しかしこの問題に正面から取り組む先駆的なプロジェクトが慶応義塾大学内部から立ち上がっている。そこではホーリスティックな自己肯定（無意識性）や問題解決能力（即興性）などを視野にいたささまざまな試みがなされており、このもっとも広義な“人間資源学”の今後に胸ときめかすにはいられない。

がいて、本当は美術館へ行って絵を見ることがツルの恩返しなのだし、行かなければ絵が描けない。私の中でインプットとアウトプットというのは、出さなきゃいけないし、入れなきゃいけないような感じで、生きていく上で必要だということに気付きました。

**武藤** ありがとうございます。インプットとアウトプット、今回だと作品を読むことと作ること、それが相互に連携して初めて何か創造的なことができるということなのでしょう。はい、ありがとうございます。人力車を引く小説家の誕生を喜びたいと思います。日吉君、どうするの。小説、書かれてしまったよ。

**日吉(実験授業参加者)** 書かれちゃいました。どうしましょう。

**武藤** 実験授業の最終回では、小説の構想を話してくれたけど、あれはどうなったの。

**日吉** 今、まだ書いています。

**武藤** それで、この実験授業について何かありますか。

**日吉** じゃあ、今までの流れとちょっと変わった話になりますが、コメントさせていただきます。まず教養研究センターで開催している夏の実験授業「新しい文学教育」を含めてですが、すごくいい授業だなと思うのです。1つは何かというと、普段、体を使って何かやるということはなかなかありません。コラージュを作ったりすることも、パントマイムでもそうですけど、普段とは違った自分が見えてくるのはすごくよかったな、と思います。

もう1つよかったと思うのは、こうやって人が集まるというのはとても大事だと思うのです。今大学に入っても、周りに友達ができずに孤立してしまう学生が結構多いのですが、しかしこういう場があって、しかも世代間にばらばら感がでないですよね。普通に生きていたら、30代以上の人たちとはなかなか会わないと思うので、こういう機会って出会いの場としてもすごくよかったなと思っています。

最近も気が付いたのですが、キャンパスでも夏の実験授業で出会った連中にばかり会っているのです。気が付けばも

う彼らとしょっちゅう飲みに行ったりして、そこら辺りがよかったと思うのが1つです。

同時にちょっと批判したい部分というのもあって、それは何かというと、学生にしても教師にしてもいつも同じ人しかいないじゃないか、という気がします。ほとんどみんなの顔が僕の頭の中に入っているのですが、これはこれで危険だなと思うのは、いつも同じような人が来ているというのと、違う人がいてもだいたいみんな性格は似たり寄ったりではないかなと思われることです。ここにいる人たちも、武藤先生を含めて。武藤先生も横山先生も、夏の実験授業に参加していた先生方も、何か系列的に似たような感じがして。

**横山** 一緒にしないでよ(笑)。

**日吉** 違いがあるというのは分かるのだけれど、「やっぱり似ているよな」って。それでここにいる伊藤君なんかは怒るかもしれないけれど、やっぱりここにいる学生って何か、「ああ、自分と近いな」と僕は勝手に思っています。だからこの前、山本君と話をしたときも、山本君の言っていることもすぐ理解できたりする。しかしそれは逆に危険なんじゃないか、と僕は思います。

なぜかという、やっぱり自分理解の問題。自己というのはある面、他者によって構築されるという面があると思うのですが、要は周りを似たような人だけで固めてしまったら、自分が変えられる可能性というのは閉ざされてしまう。僕はそれが怖いと思う。正直、居心地はいいですよ、そういう所にいると。ああ、このままでいいのかな、そう勝手に思ったりします。でもそれってものすごく自閉的だし、一步間違えたらそれこそユダヤ人の大量虐殺がつながっているわけですね、おそらく。究極的に言えば。

だからもっと、空間が開かれなかなと僕はよく思っています。だから学生も、僕みたいなひねたやつだけじゃなくて、武藤先生とか、横山先生、佐藤元状先生だけじゃなくて、ごりごり法律をやっていて、色気があることをやっていない人をここに連れてきて、「ちょっとお前、コーディネーターをやれ」とか。そういうことをやった方がかえって面白いのではないかと僕は思いました。以上です。

**武藤** ありがとうございます。こういう試みをどこまで広げて

いくのか。あるいはどのように広げていくのか。あるいはあまり広げ過ぎると問題が出てきたりするのです、その辺りはなかなか難しい所だと思います。いまユダヤ人の話も出ましたが、先ほどご紹介したように、慶應義塾大学には庄内平野に鶴岡タウンキャンパスがあり、そこで教養研究センターが主催して鶴岡セミナーなるものをやっています。東北公益文科大学の学生と慶應の学生が一緒になり、今年度は「修験道を通して生命を考える」というテーマで経済学部の羽田先生がリーダーをされ、私も現場にいましたけれども、素晴らしい内容で大きな盛り上がりを見せました。

ユダヤ人の話はともかくとして、羽田先生、今回はこういう試みを教養研究センターでやったのですが、何かコメントをいただけると幸いです。

羽田（身体知プロジェクトメンバー） 経済学部の羽田です。僕は最初の紹介で、身体知の研究会のメンバーということでご紹介いただいたのですが、ほとんど幽霊会員なので場違いな感じを持ちながら聞いていたり、あるいは報告を見せていただいたりしました。逆に感動しているのは鶴岡セミナーの参加学生である宮城君がここにも参加してくれていて、彼の詩をここで聴けるとは思わなかった。詩のことに言うと、懐かしいなという気がしています。あと、ユダヤ人というのは、僕はユダヤ史を研究しているので、その関係でそういう話が出てきたのですが、取りあえずその話は外します。

全体的にすごく面白い実験をされているということは、今日特に映像を通してあらためて実感しています。話が皆さんの話と少しずれてしまうと思うのですが、例えば言葉の話がずいぶんいろいろな角度でされていました。ここで、ちょっと宣伝をさせてください。

皆さんの中で三田の学生、あるいは近々三田に行く人がいると思います。創立150周年記念事業の一環で福澤諭吉記念文明塾というのがあり、実は今このプログラムのコーディネートをやっています。今年度はトライアルで、僕の役割は形を考えることがテーマで、言葉の形とか、ものの形とかを考えています。また講師が受講者とディスカッションするというコーナーがあり、その中で最初に挙げたい2人の講師がいます。

1人は上村淳之という日本画家です。上村松園、上村松篁という、日本画の3代目に当たる方なのですが、美の形について話していただきました。もう1つの言葉の形は、慶應



羽田功氏

のOBで、お医者さんの岡井隆さんという歌人で、彼に話をしてもらいました。

それで、美の形ですが、どうして日本画を選んだかというと、描く描かない、隠す、あるいは表れるということ、つまり日本画というのは余白でいろいろなものを表現している。つまり何も描かれていない空間が実は奥行きをもって見えてくる瞬間というのがあって、そういったものがいったい日本画の中でどういう意味をもっているのかとか、それに対して画家はどういう思いをもっているのか、と言うことを話してほしいということが目的の1つだったのです。

それはそれで面白かったのですが、もう1つ、岡井さんが話をしてくれたときに、形というテーマが、最初は抵抗があったと仰っていました。なぜかといいますと、言葉はどうしても時間に支配されてしまう。書き始めていって2行目、3行目、4行目というふうを書いていってしまう。またそう書かざるを得ない。これはもう時間が経過していくという、言葉というのは初めから時間性を負わされてしまっているのだと。それを形という言葉に代えてどう表現すればいいのか、ということに関して迷った、悩んだということを仰っていた。

今日お聞きしていて、これは先ほどの絵のことも含めてなのですが、表現する、表現しないの問題。それにかかわって時間性の問題というのをどこかで1つ新しい軸で考えてみて、時間が例えば言葉の中に塗り込められるものなのか、絵の中とか、そういったものの中に表現できるのだろうか、あるいはそもそもできないのだろうか。

そういった時間というものと肉体、身体というものはどうかかわりをもっているのか。その辺りの所をぜひどこか



頭の隅に入れて考えていただくと、また違った角度から僕も含めてみんなで共有できるのではないかと感じました。

武藤 ありがとうございます。精神分析などでも、ジャック・ラカンなどは時間性の問題というか、分析の時間を何分にするかということで時間性の問題を言っています。ここでもやっぱり時間性というか、「どこかで違う自分になった」という感覚というのは皆さんお持ちだと思います。ですから、時間性の問題というのは大きな問題で、また検討させていただきたいと思います。ありがとうございます。

今日はまた、体育の村山先生が来ていらっしゃいます。以前、村山先生は体育の授業で、「どう教えるか、どこまで教えるか」と言った話を身体知研究会でお話しされ、それを私はとても印象深く伺いました。そのことでなくても構いませんが、何かコメントがありましたら、よろしくお願いいたします。

村山（身体知プロジェクトメンバー） 体育研究所の村山と申します。1つはこの実験授業を先ほど映像などで見させていただき、身体知といういわゆる座学を超え、最後の発表の場に自分が立ち向かわなければいけないという形が、素晴らしく思えました。座学の中でも、自分の主張を他人に聞いてもらえるという場があれば、自分を表現しようとして他者がそれをどう受け取るかとか、自分の言いたいことが伝わるかどうかということで自分に負荷をかけて、結果的に自分が見えてきたり、人からいろいろなことを言われたりするという相互作用が生まれるわけです。そういう意味からも身体性



村山光義氏

のある授業だということで、すごくいいなと思いました。

私は体育をやっています。体育の授業が身体性を高めていると思っているかもしれませんが、そうではないという現実があります。私はバレーボールの授業もやっていますが、バレーボールが好きで履修をしてくれる学生が集まってきます。しかし半年たってもクラスの一部分、20人仲間がいても一部分しか名前を覚えていないのです。半年間、一緒にやったのに。顔は知っているのに、名前を覚えようとしません。自分からはもちろん、20人に自分の名前を覚えて欲しいというようなシチュエーションがないのです。本人たちはバレーボールをするということでは満足をしていると言うのですが、注目されることに非常に弱いんですね。こちらが名前を呼んであげたり、名前を覚えているというだけでびくびくしたりする。体育の授業なのに。

だから逆に言うと、私はほかの座学の授業は知りませんが、ほかの座学はどんなことをしているのだろうと。どれだけ閉ざされているのか、という気がするのです。体育ですらそうだと。学生は案外自分をさらけ出すことが嫌なので、体育でも自分をさらけ出したいくないというバリアーを張っていることがあると思うのです。

先ほどちょっと仰っていましたが、同じような仲間が、確かに体育にもおりました。皆さん、体育を取った方いますか。日吉の関係でいうと、「体育なんか取らないよ」というような人がたぶんこういう授業を取る。武藤先生とか、横山先生と、今後、体育がどうあるべきかという話もしたいと思っています。体育をスポーツだと思っている人がいて、体育は取りませんと言う人がいる。私がやろうとしている体育は、スポーツを教材にした教育ですから、体育とスポーツは違うものなのです。

「どこまで教えるか」という話にいきますと、先ほど横山先生も悩んでいらっしゃいましたが、対象がどうあれ自分がプログラムをもって対象とぶつかる。そこで人と人がぶつかり合うものが、教育だと思っています。失敗しても、私がプログラムした授業はこうだということを相手にどうしても伝えなければいけない。だからそれを伝えないでどこへ行くのだから分からないというのは、お互い無責任な行為だと思うのです。授業の枠の中で何か一方向だけでも、どうしても向けさせてあげるというのが教員の仕事だと思います。

ですから体育でも、先に技術を徹底的に教えることもあり

ますし、とにかく楽しませておいてから一つ一つ丁寧に教えた方が後から伸びるということもあるのです。最終的にどこまでもっていきたいかということは、スポーツだとわりとはっきりします。技術伝承などは、わりとしやすい分野です。むしろ技術を伝承するために体育をやっているわけではなく、自分を表現しようとか、自分に気が付くとか、他人に気が付くということの仕組みがつくれないものかと、いつも思っています。

長くなってしまいましたが、この授業で一番いいなと思ったのは、最後に一人一人が主役になってアピールする所で、それがなければたぶん自分を変えられないというか、感じ取れないだろうと思いました。

**武藤** 貴重なご指摘、ありがとうございました。今の話と重なるのは、この発表会でトリを取って「うごめいていた」——いや、かっこよかったよね——とにかく最後の発表会で大活躍だった山本君、今の話に何か絡められますか。

**山本（実験授業参加者）** あまり持ち上げられると困るのですが、自分の中で言いたいことが今まとまったので言わせてください。今、先生が仰ったことを踏まえてのことです。自分が主役になっていったということを通して、自分を客観視して変わっていくチャンスを得るということ、さらにインプットとアウトプットという話を加えてお話しします。僕の中で17歳ぐらいからずっと葛藤しているものがありました。最近収まりつつあるのですが、今回の身体知の授業でもう1回、その葛藤と向き合うことになりました。自分の欠点の部分と長所の部分というものを、人は青春時代にそれを見付けて、それを把握して変えていくものだと思うのです。その上で年齢を重ねながら変えていくのだと思いますが、しかし欠点を変えていくのには限界があると思います。まだ言い切れませんが、それよりは誰かが言っていた話なのですが、欠点を変えるよりはむしろ長所を伸ばしていくことの方が人生にはプラスになると。

それはどうしてかという、自分の長所を伸ばしていくことで、じゃあ、僕の強みはこれです、私の強みはこういうものなんですということで人が集まってきて助け合う。それで各自がもっている力同士を掛け合わせていくことで何かが生まれていく。そういう意味では、欠点を直すということよりも長所を伸ばすことの方に意味があるのではないかと最近思います。

インプット、アウトプットというものを考えていくと、自分の長所だけを出していくということはたぶん無理で、必ず欠点というものにぶつかると思うのです。だけど、変わらなくてもいいよ、というような言葉があります。例えば誰かが落ち込んでいて、「君はそのままでもいいのだよ」みたいな。

しかしそれは、何かまやかしのかなと最近少し思います。あれはただの一過性のもので、その場をしのぐためのことなのか、それとも本当に変わらなくてもいいという見方もできるのか。それがインプットとアウトプットという面からすると結構分からなくて、そういう意味ではちょっと引っ掛かっているのですが、どなたか答えをいただけませんか。

**日吉** 変わらなくていいというのは、僕は個人的には甘えだと思っている。

**伊藤** 僕は肯定します。本質的にあなたは変わらなくていいよというのは、あなたの本質はそのままでもいいということです。変わるべき所はもちろんあるにしろ、本質は変わらなくていいのだと思う。変わろうとする努力を省略して、本質論を前に出してあなたはそのままでもいいよということだと、僕は肯定します。

**山本** 本質というのは、絶対変わらない部分ですよね。

**伊藤** ですね。それを何かと言われると、もちろんそれ自体は抽象的なものだから言えないわけですが、「あなたはあなたでいい」「そのまま生きていてくれればそれだけでいいよ」という所です。

**山本** 存在という意味で。

**伊藤** 「悪い所を直さなくていいよ」という意味というよりは、「あなたの存在を私は肯定しますよ」ということ。言葉としても好きですよ、「そのままでもいい」というのは。

**武藤** 山本君の流れのつかみ方ってすごく絶妙な所があって、今の論議って要するに今回の身体知実験授業のテーマである「ボクってどこにいるの？」の話だよ。君、自己の話に、うまいこともっていったよね。今回の授業の1つのポ

## 身体知的創作本能

伊藤 弘了（2008 年度身体知実験授業参加者）

創作本能。他に「〇〇本能」の形で表わされるものとして、私が真っ先に思い浮かべるのが、生存本能である。そして、この創作本能と生存本能との間には、密接なつながりがあるのだと思っている。

人は呼吸をする。食べる。飲む。人は眠り、夢をみる。人は言葉を操る。

そういうなんやかやの営みがあって、人は生きているのだし、生きていくことができる。

こうした営みを通して脳内に蓄えられる記憶・身体に蓄えられる記憶。あるいは種としての原初の記憶。そういったあらゆるタイプの記憶から、人は物語を紡ぎ出す。

こうして、生存本能と創作本能はリンクする。生命として誕生した人が、生きていく過程でその身体に刻みつけてきたあらゆる事態は、物語に昇華する。いや、生きていくためには自らの物語を作り上げる必要があるのだとさえ言えるのだと思う。

ということか？

我々は、自分にとって不都合な経験を無意識の中に押し込め、都合の良い情報を編集して、筋の通った巨

大な物語を描き出して見せようとする。そうして出来上がった物語は我々のアイデンティティを保証してくれる。アイデンティティを守り続けるためには、その物語に絶えざる加筆・修正を施す必要がある。

人は死ぬまで自らの物語を書き継ぐ。人が生きていることを定義する一つの試みとして、物語を語っていることと同義だとしても、本質は外していないように思う。

自分を守るための物語。エネルギーの向きを少し変えてやれば、そこに文学を始めとする芸術作品が生まれる。優れた芸術作品とは、人間の生存本能を鋭く映し出す鏡のことだ。

我ながら、少し気取った感想文が書けて、ますます満足している。

タイプの異なる多くの人間の創作本能に触れることのできた今回の身体知実験授業は、私にとって非常に有意義な経験の場となった。もちろん、自分の物語を書くうえにおいて、である。

イントだと思っているのは、「自己って何」ということをみんなで本を読んで考えてそこで終わるというのではなくて、体を動かしてみる、何か動いてみる、何か行為を試してみる、何か行動してみる、何か作ってみることによって逆に生れてくる自己を体験しその体験の意味を考えてみようということなのです。

つまり、ロダンの「考える人」みたいな動かない形で自己を理解しようとするのではなくて、といって「つまらないこと考えないで、さっさと行動しろ」と言うように思考停止させて動かすというのではなく、考えてから動いてみることによって、そして考えながら動くことによってつくられる自己というものがあると思うので、そういう意味で最後に創作をするという流れだったわけです。山本君が言った、長所を伸ばして生きていくというのは、好きなことを創作して生きていくということともつながるし、そこから考えると、今のままでいいのかわいのかというと、ある意味は今のままでいいんだよね。いいのだけれど、でも、同時に何か動いてみる、やってみる、ということが大切なのです。何か動いてみると、必ず今の自分とは違った自己が生れてくるからです。だから、僕は山本

君の話を聞いていて、うまくこの自己というメインテーマにもってきけたと思う。「今のままの自分でいい、でも今のままの自分を肯定できるならば、かえってある種の抑圧が取れて必ず何かやりたいことが出てきて動きたくなるはずだ、動いてみれば必ず新しい自己に出会うことができる」というのが、矛盾しているようだけれども、自己について大切な所だと私は思っています。

中島 「そのままでもいいよ」というのは、それを受け止めたときにうれしいという人なのですね、結局は。単純に自分を肯定したいということなのです。自分を肯定したい場合は、自分の欠点と自分の長所を分けるというのはおかしいわけです。欠点は長所にもなり、長所は欠点にもなるのですから。分けている基準は、結局自分が刷り込まれた周りの価値観なんだと思います。

だから、自分にとって自分が生きていく上で、長所も短所も実は長所だったということを知るためにはそういうアクション的なものとか、あるいは自分の全感覚を、悪いもの

を全部出して、悪いと思っていたものを出さなきゃ何かができてこない。創作活動をした後で気付いてくるものがある、そのときに「そのままでもいいだよ」という場合は大丈夫だと思うのです。

だから、創作している人は、例えば20歳なら20歳の完成があって、30歳なら30歳の完成があって、40歳のそれぞれ完成があるのだと思います。そのときにしか出せないものって、あるのですから。だから、今、俺は完成しているという、常に完成している感じというのは、そういう倫理観じゃなくてアクションと一緒にやっていかないとなかなか分からないかなという感じがしました、ということです。

**武藤** ありがとうございます。創作するということは、ありきたりのことはやらないということでしょうね。そのありきたりのことはやらないということの中には、世間の価値観を捨てるという部分もある。ある意味ではやばい部分が当然あるわけで、でもそれをやってみてそこからまた新たな価値が生まれてくる。

だから中島先生の言うことも参考にしてください。堀江ご夫妻、この辺りで何か。どうですか。奥様かな、今、体が動いていたから。

**堀江(実験授業参加者)** 賢いことは何も言えないのですが、いいでしょうか。この体験授業には前回から出ているのですが、私は職場が遠いので、いつも皆さんが始めている頃にくるのですが、すごいですね。会場に入ると、大の大人がみんな、「うー」とかと言って寝転がっている。あるときは突然英語で「わーっ」としゃべっている先生がいて、みんなは「どーっ」と笑っていて、何で笑っているのだろう、という光景がある。大人が寄ってたかって粘土で遊んでいたり、壁に向かって歩いていたとか。戸を開けるたびにいつも面白くて、ディズニーランドじゃないですけど、いろいろなことを体験させてもらいました。

私は教員をやっているのですが、教員は子供にやれやれと言うだけで、実はあまり自分の手を汚していないというのがよく分かった授業でした。みんなと一緒にやればすごく楽しいと思うのですが、頭でっかちですから、子供たちにやらせたいと思うのですが、子供がやることを想像するけど、自分から積極的にすることはないと思うのです。だから、実

践できたことが楽しかったと思います。

個人的にはさすがに効果なのですが、壁をね、みんな同じ動作をやるじゃないですか。あれは意外と一番楽しかった。そういうときはたぶん邪念がなかったのでしょうね。そういう経験をするのが大事な授業だったと思いました。

**湊** どういうふう言葉にしていかが分からないのですが、いろいろ実験してみようとか、試みる事が目指している方向として授業の枠組みにありながら、僕の中ではとても窮屈だったり、評価が付いて回ったりということも感じてました。何か提示するプロセスが起きてくるときにそれが受け止められ、あるいはそれに何かしら生の形で反応するのではなくて、抱えている役割、例えば教員という役割をもってコメントしてしまったり、話を丸められてしまったり、そういうのがわりとコンスタントに印象的でした。

やっぱり授業という言葉だったり、あるいは大学というものの風土がもっている慣習・しきたりだったり、あるいは既成の何か勢いみたいなものがある、そのままそれを十分振り返りきれないという形が重ね続けられている感じがしていました。それとは反面、いろいろな可能性が、この〈場〉にとても秘められていました。それは先生方だったり、インストラクターの方たちだったり、それからいろいろな形で毎回加わっていらっしゃる立場の人たち、学生だったり、そういう形の人が加わっていたり、それだけ多様な可能性がここに持ち込まれていて、そこにはまた、金太郎あめみたいに同質のものが集まっているようにも感じられました。そういう側面もあるかもしれないし、同時にまったく実はお互い同士が異質で、いくら言葉で交わし合っても寄り添えない、そういうものもあるだろうし。そういういろいろなぶつかり合いが何となくおとなしく行儀よく収まってしまう感じがすごくもったいないと思っています。

大学といういわゆる高等教育をうたう場だったら、なおさら可能性はあって、義務教育とかカリキュラムとかだけではなかなか動きづらい部分を試みてゆけたらと。でも同時にさっきから爆発という言葉が何度か出ていましたけれど、単に爆発させてしまったり、風穴をぶち開けてしまうような感じだと、これまでの流れになじんでいる感覚からだと、ちょっと受け止めるのがしんどかったり、不安が生じたりもするかもしれません。

いろいろな工夫をこれまでされてきているのはすごく分かりますが、例えばこの場1つ取っても分かりやすく言うと、教員の役割を取る人たちがわりと前の方に優先的に当てられているとか、そういう流れというのは、僕はすごくつまらないと思うんです。

そういうことがなじむ場面もあると思うけれど、こうした実験授業で試みていこうとするときに、うごめいてくるようなこととか、生身のいろいろなことというのは、下手をするととても危険性がある、あるいは抱えきれないでしんどいことというのは、僕たち誰もが受けるかもしれない。だからそれに対しての守りというのは丁寧に押さえながら、それでも今日の設定は本来振り返りの場であればこそ、その時間を一緒に集っていた人たちが自然に融通無碍に、思いや言葉や感情をわき起こらせることができるようなプロセスというのをどういうふうに保障していったり、守っていったりできるのか。そういうビジョンとか、展望をどんなふうにもっていきけるのかというのは、この授業の今後のすごく大事なポイントなんじゃないかと思っています。

そんな感じがあって、インプットとか、アウトプットとか、何かしらそういうことだけで収まるのではなくて、例えば体1つ取ってみても、あるいは命の在り方1つ取ってみても、個体としてだけで完結しているわけではないし、自分の中だけでも出入りというのが順番に、あるいは特定の順番で起こるのではなくて、すごく有機的に交響し合っているみたいな、それってまさに人がこう集まっている場で自然に起きてきたことだったと思うんです、これまでの数回の中でも。

そういう響き合いをどんなふう気付いていけたり、自分自身の中でそのときに何が起きていたかをお互い同士自覚し合えていたり、そういうことがどれくらいしていけるかとか、僕は個人的にはそれに興味があって来ました。そのプロセスの中でどうやっていくかということであって、役割や権威が抱えてくれるというのはすごく大事な部分でしょう。しかもそれだけではなくて、ご自身のいろいろな感覚だったり、感情だったりそのときみんなの中に開いてくれている。その両方をどのくらい大事にしていけるかというのが、やっぱり単に教員役割だけで授業をしたことになってしまうのとは違う、実験的な可能性なのではないかと思っています。なかなか分かりやすく言葉にできなくてごめんなさい。

#### 資料 C

グループの凝集性と自由さ：

\* まとまり感やグループへの所属感、居場所感、いごちの良さ

+ やや個性が最初から強調されていてでも柔軟な凝集性があったのでは

例：二人での即興や、グループでの演劇など

\* \* グループのなかで、そこにいて、自由に、あまりまわりに影響されすぎずに、自由に発言したり、しなかったり、動いたり動かなかったりを、自分の感覚でやれたのだろうか？ どうだったのだろうか？

\* \* お互いの心地よい距離

+ 心地よさだけでなく居心地悪さや葛藤の体験も大事だがそれはあったのだろうか？ あるいはそれを言葉にしていけることはできたのだろうか？

手塚 最後に湊さんから多少爆弾的な発言が出てきたので、率直なコメントを述べます。資料Cのグループの凝集性と自由さという所の中で、心地よさだけでなく居心地の悪さや、葛藤の体験をこういうグループでやっていく場合には大事なことであって、それとどういうふうに向き合っていくのかということも1つのテーマではあるということは、私自身は意識していたのです。

ただそれが、まさに仰ったように、それに生々しさを込めてお互いにシェアするだけのものを、もちろん最終的には作っていきなという気持ちはありますけれども、正直言って別に教員ということではなく、教員でもあるしコーディネーターでもあるし、でも教員でもコーディネーターでもない私として感じるのは、まだまだそれをやっていけるだけの、率直に言えばそれだけの力量は私の中に今はないかなという感じがしているのです。

これは個人的なことなのですが、だからこういう場で、たぶん横山先生も去年の研究会のときに仰ってらした、ぶつかることの大切さを感じています。だから、私は最初に違和感という言葉を使って表現させていただいたのですが、そういうことを重ねていく中で、そしてまた湊さんが最後に言うてくださったからよかったのですが、それをもう少し早い段階で感じていらしゃったら、むしろ湊さん自身がもう少し早い

段階で返していただけるようであつたらよかったなというのと、逆にそういうことを可能にしないような、何か最後まで我慢されてしまったようなものももしかしたらあつたのかもしれないなということは、今後の課題として感じました。

湊 個人的には別に、あまり我慢しないで過ごしていましたけれど。

武藤 湊さんの今の発言、歓迎いたします。仲良しごっこをしてもしょうがないので、みんながよかったねと言って終わってしまうのは何か面白くないし、確かに仰るように、私は性格的にはご存じの通り、結構やんちゃなのですが、ここではやはりまとめ役の教員の役割というものを意識してきました。最近ようやく50歳になって常識ということが身に付き始めていますので(笑)。これは、だからおそらく湊さんの視点から言うとは非常に憂うべき事態だと思うんです。でもやっぱり仰る通り、教員としてこの場をただまとめなきゃいけない、進行しなきゃいけないというときに、何か無難に行こうというバランス感覚があつて、それがいいのか悪いのかというのは自分でもよく分からないのです。ある種の思い切った、踏み出して空振りでもいいから何かパンチを放つとか、蹴っ飛ばしてみるとか、そういうどこかで、それこそ我々がもう何かはじけちゃうみたいな瞬間って確かにあってもいいと思うんですね。

だから、ここでも無礼講でみんな何か言いたいことをしゃべるような話になったらもちろんいいのですが、しかしこの実験授業は大学からお金をもらってやっているので一応きちんとした報告書も書かなきゃいけない。その結果次第で来年またこのような授業のためにお金がもらえるかどうかが決まるとかそういう要素もあつて、もう本当に仰る通り、つまらない大人になっちゃったという、そういう部分もあるわけです。

こういう貴重なご意見を取り入れながら皆さんにご迷惑、あるいはご協力をお願いしながら、先生方あるいは参加者の方々にご協力をお願いしてこれからもやっていきたいと思っています。

今日のこの回も本当に皆さんからいろいろご発言をいただいて、我々はエネルギーをもらいました。学生たちは知らないかもしれないが、教員って結構学生に冷たくされるとすごく傷つくものです。だから、そういう意味でこうやって付き合っ



第3回授業 コラージュ作成

てくれる人たちというのは、本当に宝物のように大切な人たちなのです。とにかくエネルギーを皆さんからいただいたと思います。

とりわけ今日は三谷さん(註:80歳を超えた高齢の学生)に来ていただけていますが、三谷さんが創作でご自身の一生を振り返ったような作品を作られて、そこからもエネルギーをいただきました。そういう意味で本当に若い方からお年のいった方までいろいろな形でエネルギーをいただき、これからも頑張っていきたいと思いますので、どうぞ皆さん、よろ



しく願います。今日は、どうもありがとうございました。

横山 最後に一言なんですが、実は私、本当にこの実験授業を始めたばかりの時は、違和感ばかりだったんです。今でもいかんともしがたく違和感が募るときがあります。「違和感」という言葉は正しくないかもしれないけれど。まるでコンサルティングを受けているような感じでこの授業に臨むときもある。自分の中、他人の中に見たくないものが見えるときもある。それで怖くなるときもある。でもそれを受け入れることも必要だと思うようになった。だから、今はもう本当に自分から違和感を…この違和感と向き合っていくことが自分のやるべきことだという気持ちがすごくある。1年目から手塚先生や佐藤先生にはとにかくある意味でぶつかってばかりだったのです。だけど、それは違和感に対峙することが嫌だというのではなくて、からだも心も未だにいろいろなことがあまりに分からない。分からないから、ずっと問いかけ続けていきたいという気持ちのあらわれなのです。

手塚 そういうことを、私たちコーディネーターの間ではやっ

ていたんです。

横山 今も今後も、それはたぶん変わらないと思います。

手塚 それはそうですね。大変だけど、でもとても大事なという所で、合意があります。

横山 コーディネーターの間での、裏の血みどろの戦いについてはここでは語れません。結構、悲惨なときもあって（笑）。でもそれこそがこの授業の推進力になると信じたいのです。講師の方々、参加者の方たちも本当にありがとうございました。

# 大きな canvas に身をゆだね

～進化し続けるところ、からだ、そしてあたま～

放送大学准教授、臨床心理士 佐藤仁美

2006年に始動した身体知実験授業も3巡を終えた。毎年主たるコーディネーターが交代し、その持ち味を生かしたプログラムが展開されている。どの年も、まず、コーディネーター・リーダーのカラーが大きな canvas に一点落とされ、それに参加者が思い思いに色を添えていく。ある日はそのカラーで全面を薄く覆われた canvas が用意され、そこに皆で筆を走らせ、指で塗りたい、collage するといった作業が加えられていく。そうして全日程を終えた瞬間、巨大な造形物が見事に姿を現す。それは、形あり、形のないものでもある。色彩を感じることもできうるし、感じえないものでもある。それは、誰にも共通に見聞き感じることの出来るモノでもあり、見る者・触れる者・聴く者一人ひとりに、各々感じられる形と色が存在するモノでもある。

2006年の「体をひらく、心をひらく」は、身体と心の異なる位相を、まずは身体で感じ、ふれると同時に心（自らのウチ）にふれ、ウチにもソトにもふれることによってひらかれていく心と体を、それぞれのペースで体験していった。実際に体を動かし、体から呼びかけ、それと前後して心が動き、最後に頭でまとめるプロセスが自然と流れていた。

2007年の「アートで心をひらく」は、個人のウチにふれながら、もっと大きなもの（神のような宇宙的な）につながり、その存在自体をアタマで考えることを超えた大きなものに身をゆだね、ありのまま（本当）の自分と出会う機会を与えられた。自分のプラス面もマイナス面もまとめて自分という存在であること、それは、自分を取り巻く大きなものとのつながりがあってこそ、そこに存在意味を見出せたものであると思われる。

2008年の「体をひらく、心をひらく、ボクってどこにいるの？」では、2007年の個を超えた大きな存在との関わりとはある意味対極的な Mikrokosmos の世界に突入した「わたし」という宇宙（世界）旅行への誘いであった。自分の局部、これまで意識したことのない感覚器官などが敏感になっていくと同時に、開発されていく神経・筋肉とその組織、つなぎとなる synapse の増殖、〇〇自



佐藤仁美氏

己が無数にわが身を蠢き、対話する。個の inner-world に旅しながらも、実は大きな宇宙につながっていた。それがたわしに象徴され、展開され、蠢き対話しながらひとつのまとまりを得る新体験だった。

いつの時にも変わらず安心して自己・他者・時と場に向き合え、ひらけるのは、この時と場を心と体で支え続けているコーディネーターとスタッフ、研究会、もっといくなれば慶應義塾大学という大きな器（canvas/campus）が与えてくれている保障から生まれているものといえるだろう。今後、益々の進化・発展、斬新な授業展開に期待している。

## PROFILE

さとう・ひとみ 臨床心理士、芸術療法士。放送大学教養学部准教授・同大学大学院文化科学研究科臨床心理プログラム准教授を務めている。専門は臨床心理学。



慶應義塾大学教養研究センター

2008 年度基盤研究 身体知プロジェクト  
研究会報告「体をひらく、心をひらく ボクってどこにいるの？」  
— 2008 年度の身体知実験授業を振り返って—

2009 年 3 月 31 日発行  
編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター  
代表者 横山千晶

〒 223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1  
TEL 045-563-1111 (代表)  
Email lib-arts@adst.keio.ac.jp  
<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

©2009 Keio Research Center for the Liberal Arts  
著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。  
ISSN 1880-3628  
ISBN 978-4-903248-23-3